

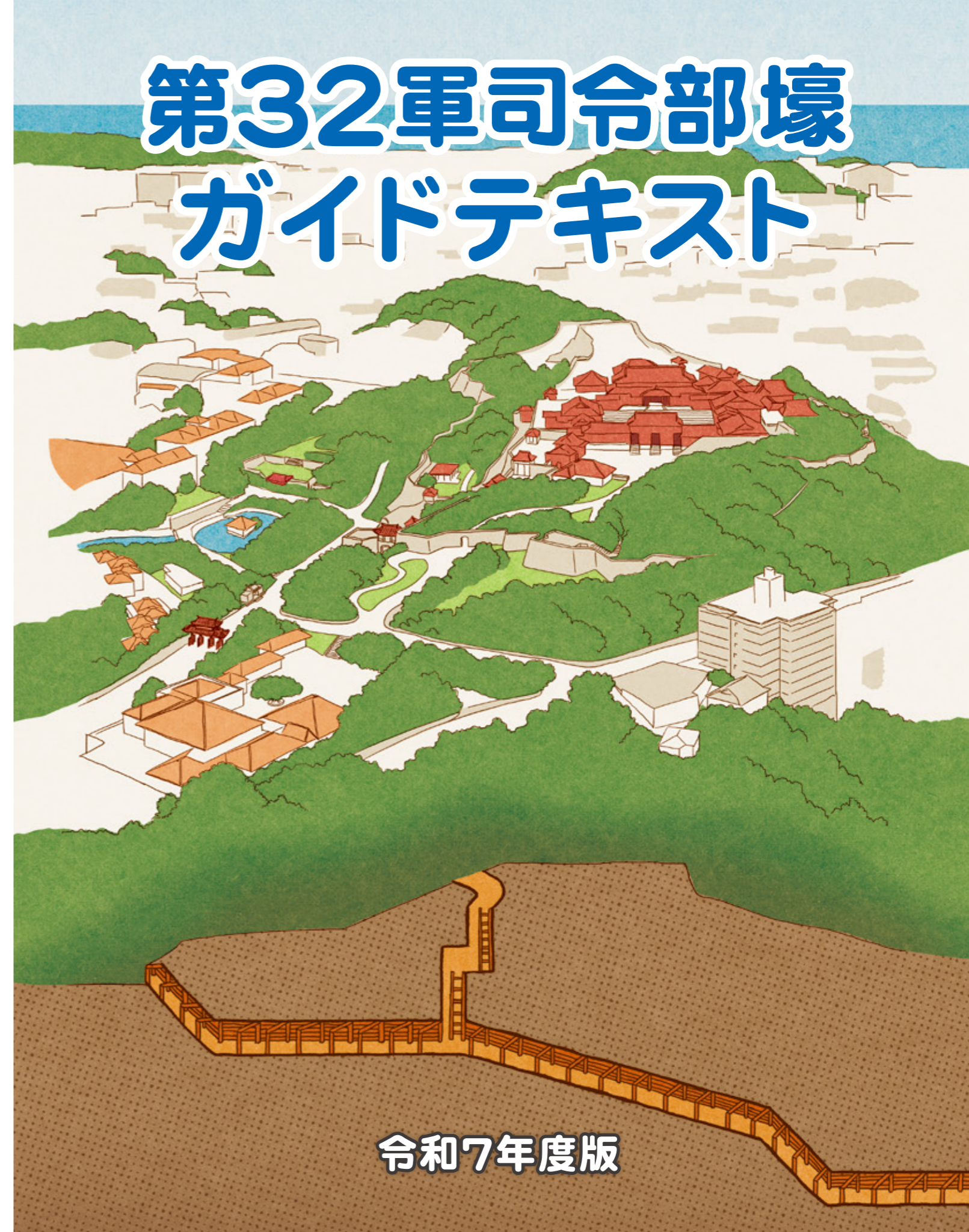
第32軍司令部壕 ガイドテキスト

第32軍司令部壕ガイドテキスト 令和7年度版

2026年（令和8年）3月発行
企画・発行：沖縄県知事公室平和・地域外交推進課
098-894-2226

編集・作成：株式会社まるとまるっと

沖縄県 第32軍司令部壕専用ホームページ
<https://32okinawa.com>



令和7年度版

第32軍司令部壕ガイドテキスト

1. まえがき	3
2. 沖縄戦と第32軍	4
2.1 沖縄戦の経過	4
2.2 沖縄に配備された第32軍	6
2.3 第32軍司令部壕	7
2.4 南部撤退の決定	8
2.5 司令部の南部撤退によりもたらされたもの	9
2.6 首里の戦争被害	10
2.7 日本軍関連の一次資料	12
2.8 第32軍司令部関連年表	15
3. 第32軍司令部壕	16
3.1 第32軍司令部壕の構造	16
3.2 第32軍司令部壕から見つかった遺物	17
3.3 日本軍作成の壕内図	18
3.4 米軍作成の壕内図（インテリジェンス・モノグラフ）	20
3.5 米軍作成の壕内図（インテリジェンス・モノグラフ）日本語訳	22
3.6 沖縄県の調査による現況の壕内図	24
3.7 第32軍司令部壕に関する証言	26
第32軍司令部壕と関連施設、周辺のポイント	28
4. 第32軍司令部壕内部と関連施設	30
4.1 第1坑口、坑道	30
4.2 掩蔽壕	32
4.3 ハンタン山の通信所跡	34
4.4 立坑A	36
4.5 第2坑口、坑道	38
4.6 第3坑口、坑道	39
4.7 「エンジニアトンネル」	40
4.8 第4坑口、坑道	41
4.9 立坑B	41
4.10 第5坑口、坑道	42
5. 第32軍司令部壕周辺の各ポイントの解説	44
5.1 首里城	44
5.2 園比屋武御嶽石門	46
5.3 忠魂碑	48
5.4 円覚寺跡	49
5.5 沖縄師範学校（男子部）の門柱跡	50
5.6 留魂壕・新聞社壕	52
5.7 西のアザナ	54
5.8 第5砲兵司令部壕跡（通気孔）	56
5.9 首里教会	58
5.10 中城御殿	60
5.11 特設警備第223中隊永岡隊慰霊之碑	61
5.12 一中戦没学徒資料室	62
5.13 首里金城町石畳道	64
6. ガイドのモデルルート	66
7. 沖縄県の取り組み	68
8. 参考文献リスト	70
脚注	71

1 まえがき

2025年（令和7年）に戦後80年を迎え、戦争体験や教訓の風化が懸念される中で、沖縄県内の多くの戦争遺跡は、戦争の不条理さ、残酷さ、醜悪さを知り、平和の尊さを学ぶ平和教育の場である一方、開発や劣化などで原形をとどめられなくなっていることから、その保存・公開が求められています。

また、戦争体験者の証言を直に聞くことが困難となりつつあることから、体験者の証言を収集・記録した資料や史実に基づく研究成果とともに、「物言わぬ語り部」である戦争遺跡の活用が求められています。

とりわけ、沖縄戦の軍事的中枢施設であった第32軍司令部壕は、住民を巻き込み熾烈な戦闘が展開された沖縄戦の実相を知る上で極めて貴重な戦争遺跡であることから、その活用を行うことで、多くの人々の考えるきっかけとなり、沖縄戦の歴史的教訓を次世代へ正確に継承していくことに繋がります。

2025年（令和7年）3月策定の「第32軍司令部壕保存・公開基本計画」では、同壕を、沖縄戦の実相を伝えることができる平和教育・学習の場として利活用するとともに、見学者に同壕を解説するための語り部やガイド等の育成に向け、収集した資料や証言を参考にしたガイドテキストの作成に取り組むこととしています。

策定した計画を踏まえ、この度、沖縄県の公式な刊行物である『沖縄県史』や、本県でこれまでに収集した資料等を活用した「第32軍司令部壕ガイドテキスト」を作成しました。

本ガイドテキストでは、沖縄戦の経過、第32軍司令部の展開、第32軍司令部壕の構築過程や構造、壕の各ポイントについて解説するとともに、同壕周辺の戦争遺跡や沖縄県の取り組みを掲載しました。

また別冊として、ガイドが現場で使用できる、写真資料編も併せて作成しました。

本ガイドテキストを通して、第32軍司令部壕を対象としたガイドの解説内容が更に充実し、より正確に沖縄戦の実相を伝え、継承していくことに結び付くことを期待します。

2026年（令和8年）3月
沖縄県知事公室平和・地域外交推進課

2 沖縄戦と第32軍

2.1 沖縄戦の経過

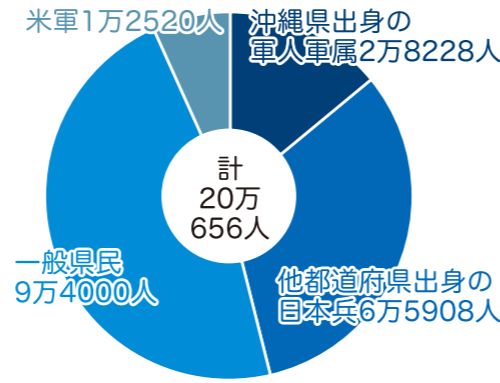
沖縄戦は、アジア太平洋戦争末期の1945年（昭和20年）に日米両軍が沖縄で住民を巻き込んで繰り広げた地上戦です。このとき沖縄戦を指揮したのが第32軍司令部でした。住民を巻き込んだ地上戦は沖縄以外にもありましたが、軍人よりも一般住民の犠牲者が多いというのが沖縄戦の特徴でした。また、日本兵による避難壕追い出しや食糧強奪、スパイ嫌疑による虐殺、「集団自決（強制集団死）」などもおこりました。

アジア太平洋戦争において沖縄は、1943年（昭和18年）半ばまでは、日本陸海軍にとって軍事戦略上はさほど重要な拠点ではありませんでした。しかし、ソロモン諸島・東部ニューギニア方面での米軍の反撃が激しくなり、同年9月30日に「絶対国防圏」が設定されてからは、第一線陣地となったマリアナ諸島（サイパン・グアム・テニアン）やパラオ諸島を背後から支援するための第二線陣地（航空中継基地）としての役割を担うこととなりました。

1944年（昭和19年）7月から8月に中部太平洋マリアナ諸島が陥落すると沖縄は第一線陣地となり、第32軍の陸軍部隊が次々と送り込まれました。このとき新しく第32軍司令官として着任したのが牛島満中将でした。その後、決戦の場と考えられていたレイテ決戦が断念されたことで大本営の関心は本土決戦に向き、沖縄は本土決戦のための時間稼ぎの場として位置づけられるようになります。1944年（昭和19年）8月には疎開船「対馬丸」がアメリカの潜水艦により撃沈され、疎開学童をはじめとした住民に戦争の被害が及びました。

10月10日には、十・十空襲（南西諸島空襲）で南西諸島が初めて本格的な戦争被害を受けました。南西諸島はそれ以前にはほとんど空襲されたことがなく、沖大東島が9月27日、および10月3日に大型機各一機による銃撃を受けた程度でした。¹ この十・十空襲で沖縄住民は米軍の攻撃のすさまじさを実感しました。同日午前7時から午後4時近くまで、第一次から第五次にわたり空襲が行われました。攻撃地域は沖縄島だけでなく奄美群島・大東諸島・宮古・八重山にまで及びました。本来の攻撃目標は飛行場や船舶、港湾施設、軍事施設で

沖縄戦の戦没者



(注) 沖縄県による推計値。英国兵や朝鮮半島・台湾出身者は含まず。

出典：「沖縄の援護のあゆみ」1996年（平成8年）
沖縄県生活福祉部
[1957年（昭和32年）頃に琉球政府が推計]



▲十・十空襲 [1944年（昭和19年）10月10日]
／出典：沖縄県公文書館

あり、民間地区は対象になっていませんでしたが、第四次・第五次攻撃で那覇市の民間地区が集中攻撃を受けました。

1945年（昭和20年）3月23日、米軍は南西諸島全域を空襲し、24日には艦砲射撃が始まりました。3月26日早朝には、米軍の沖縄攻略作戦として第77歩兵師団による慶良間諸島上陸が開始されました。米軍は沖縄島への上陸に先だち、戦闘用艦艇と輸送船が風波と潜水艦攻撃を避けて安全に投錨、停泊できる場所を確保しようとしていました。一方で、米軍がいきなり慶良間諸島に来る可能性は少ないと判断していた第32軍にとっては意表をつかれた形となりました。結局、慶良間諸島の主要な島々は3月29日までに米軍に占領され、ここを基地としていた特攻



▲占領した飛行場を守るための、米軍の凄まじい対空砲火 [1945年（昭和20年）4月16日]
／出典：那覇市歴史博物館

艇（海上挺進戦隊）は28日に少数が出撃してLCI（歩兵揚陸艇）一隻に損傷を与えただけで、残りは陸上で全滅しました。

4月1日には、米軍は沖縄島西海岸（現在の読谷村・嘉手納町・北谷町の海岸）に上陸しました。米軍のアイスバーグ作戦（沖縄攻略作戦）では総兵力は約55万人でしたが、対する日本軍の兵力はおよそ10万人、しかもその中には防衛隊や学徒隊、義勇隊など現地召集の補助兵力を多く含んでいました。激しい戦闘が展開され5月に入り米軍が首里に迫ると、第32軍司令部は南部の喜屋武半島への撤退を決め、なおも戦争を続けました。

南部には地元住民のほかにも戦火に追われて避難してきた人びとがいました。「鉄の暴風」と称される米軍の猛爆撃にさらされ、隠れた壕も攻撃の対象となり、住民と日本軍が混在する中で多くの犠牲を生むこととなります。沖縄戦では県民の4人に1人が犠牲になり、民間人の死者は軍人を上回りました。



▲捕虜になった少年兵。左が18歳、右が20歳と米軍の説明にはあるが、実際には13～18歳の中学生が多かった。 [1945年（昭和20年）6月17日]
／出典：沖縄県公文書館



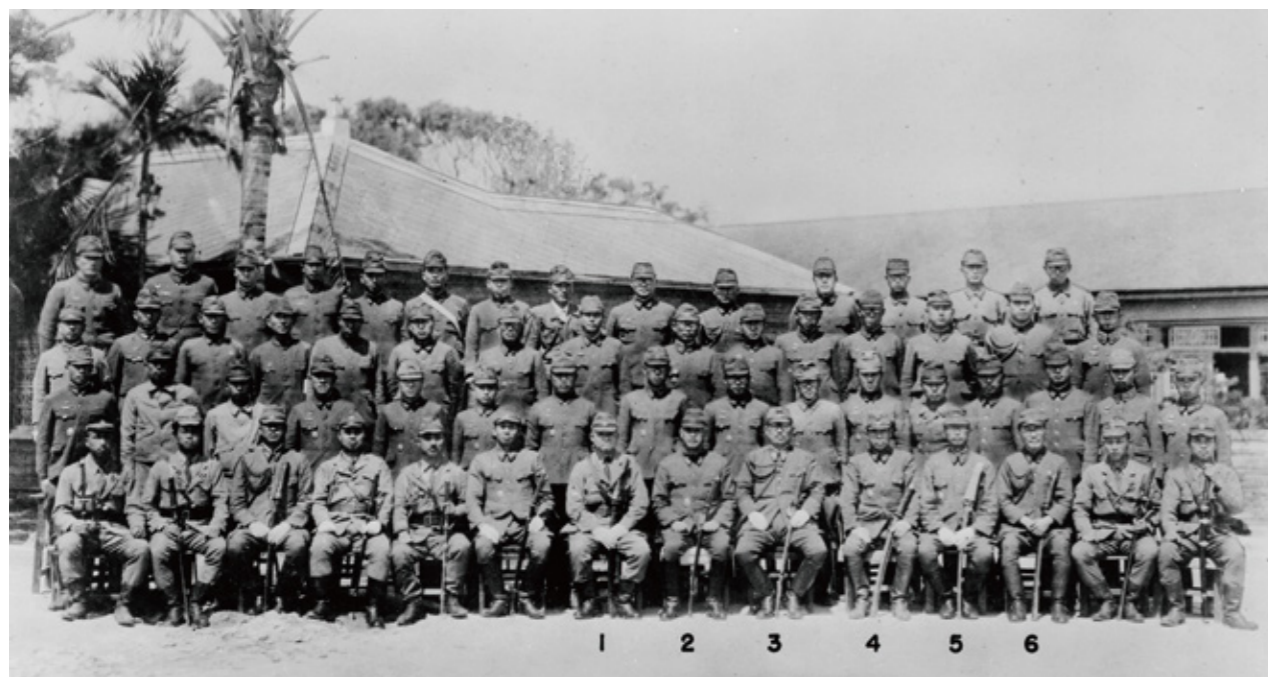
◀壕内から救出される母と子
／出典：沖縄県公文書館

2.2 沖繩に配備された第32軍

第32軍（通称号・「球」）は、1944年（昭和19年）3月22日に編成された、奄美群島から先島諸島までを作戦範囲とする部隊です。編成当時の人事は、司令官・渡邊正夫中将、参謀長・北川潔水少将、高級参謀・八原博通大佐が軍司令部の中心でした。

第32軍はもともと航空作戦準備のための第二線兵団で、当初課せられた任務は航空決戦の準備と飛行場の確保というものでした。そのため沖縄県の一般住民を動員して飛行場の建設を進めましたが、レイテ決戦のための戦力抽出などの事情により、次第に当初の航空決戦構想とは異なる地上持久戦を志向するようになります。7月以降はマリアナ失陥にともなって急速に増強され、「連絡圏域」（台湾・沖縄方面）における「決戦」を担うべき第一線兵団となりました。第一線兵団と位置づけられた後は、北川参謀長が7月に、渡邊司令官が8月にそれぞれ転出し、司令官・牛島満中将、参謀長・長勇少将が着任しました。最終的に、牛島司令官、長参謀長、八原高級参謀、木村正治後方参謀（中佐）、釜井耕輝航空参謀（中佐）（のち神直道少佐に交代）らがその後の沖縄戦準備・遂行にあたった第32軍の最高幹部となりました。

第32軍では、司令官が最高指揮権をもち、参謀が作戦の計画・指導を行っていました。各部隊からの戦闘報告を受け、戦況に応じた意思決定を軍事命令として指揮下の各兵団・各部隊へ伝達し、さらに大本営などの上位組織に対して戦況を報告するなど、第32軍司令部は文字通り「軍の頭脳」として機能していました。



▲日本軍第32軍首脳部の集合写真 ①大田実海軍沖縄方面根拠地隊司令官、②牛島満第32軍司令官、③長勇第32軍参謀長、④金山均歩兵第89連隊長、⑤北郷格郎歩兵第32連隊長、⑥八原博通高級参謀 [1945年（昭和20年）2月] / 出典：沖縄県公文書館

2.3 第32軍司令部壕

第32軍は兵力の減少と決戦構想の転換により、しばしば陣地変換を行いました。例えば、第32軍司令部壕もその一つです。

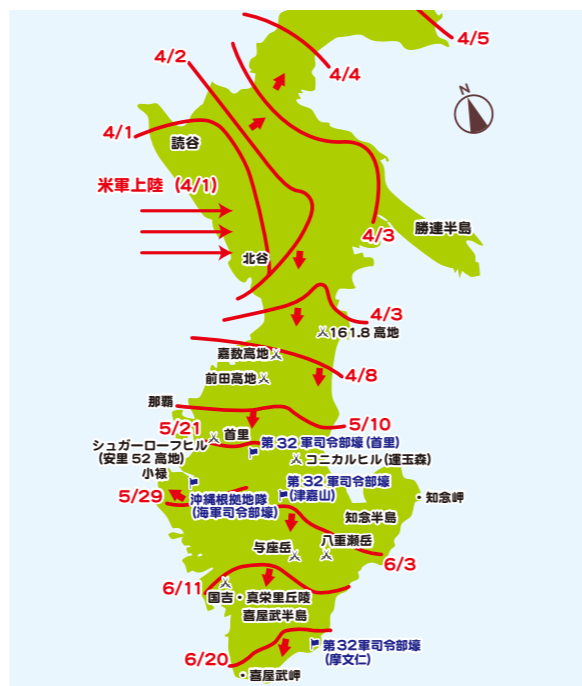
第32軍は当初、真和志村（現在の那覇市）松川の蚕糸試験場に司令部を設置し、読谷山村（現在の読谷村）石嶺久得と南風原村（現在の南風原町）津嘉山の2か所で司令部壕の構築を進めました。しかし1944年（昭和19年）10月10日の米軍による十・十空襲（南西諸島空襲）以降、艦砲射撃や空襲に耐えられる強固な壕への移転が検討されます。その結果、新たに首里城の地下に司令部壕を構築することが決定されました。なお津嘉山の壕には、司令部のうち経理部など軍の後方支援をする部局が配備されました。

移転先である首里城のある丘は標高が高く、周囲の地形をよく見渡せ、かつ琉球石灰岩の硬い岩盤からなるため、移転先の条件に合っていました。構築作業は1944年（昭和19年）12月9日に開始され、第2野戦築城隊を中心に、沖縄師範学校や県立第一中学校の生徒らによって行われました。1945年3月23日には第32軍司令部壕の本格的な使用が始まります。しかしその後、大本営の作戦介入による混乱もあり、第32軍は持久戦に徹することができないままに戦力を消耗していくこととなります。



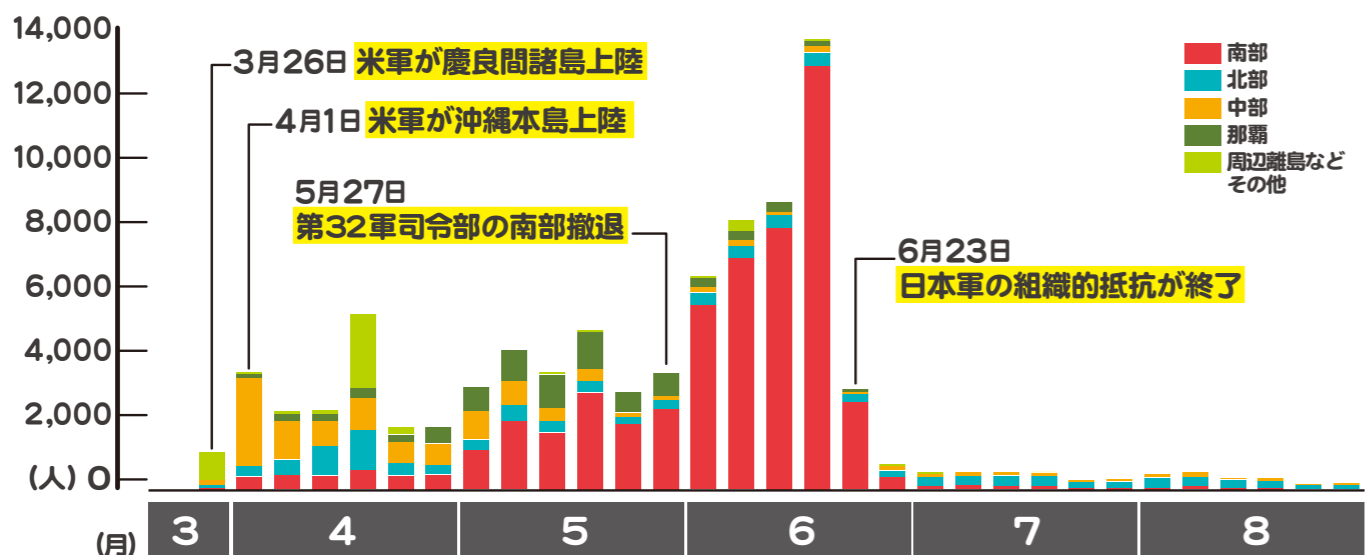
2.4 南部撤退の決定

1945年(昭和20年)5月4日、日本軍は米軍に総攻撃をかけますが苦戦し、翌日には攻撃を中止します。この時点で司令部の置かれた首里の防衛は困難となっていました。壕内では今後の作戦として、①首里決戦案、②知念半島撤退案、③喜屋武半島撤退案の3つが議論されます。そして5月22日、本土防衛のための時間稼ぎ(持久戦)を重視した司令部は、喜屋武半島撤退を決定しました。その理由としては、交通網上もっとも撤退が容易であったことに加え、第24師団の旧陣地があり軍需品が集積されていたこと、自然洞窟(ガマ)が多数存在したことなどがあげられます²⁾。



あわせて定められた「新戦術計画」にもとづいて残された兵力を南部に再配置しましたが、もはや米軍と戦えるだけの戦力は残っていませんでした。こうして司令部は5月27日の夜、豪雨の中で撤退し、南風原村津嘉山を経て、30日には最後の司令部壕となる摩文仁の壕へとたどり着きました。およそ4ヶ月かけて構築された司令部壕はたった2ヶ月で放棄されることとなりました。

1945年3月26日～8月末までの沖縄県出身戦没者数の推移



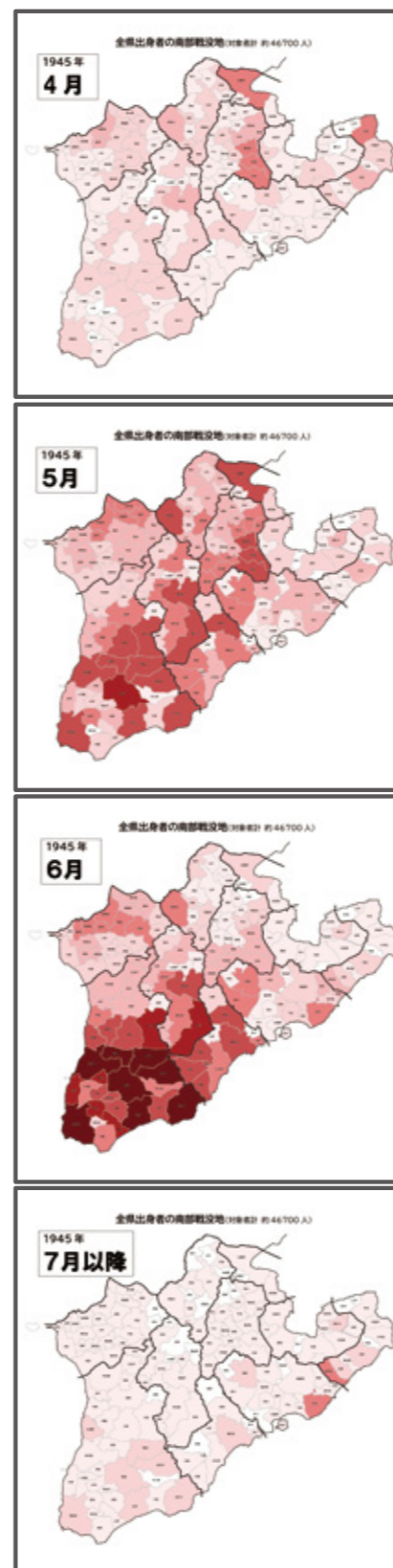
▲1945年3月26日-8月末までのおおよそ5日ごとの沖縄県出身の戦没者数の推移/出典: 平和の礎の刻銘者データより作成
同時期に沖縄島および周辺島嶼で亡くなった沖縄県出身の戦没者のうち、戦没日時・戦没場所がわかる約8万5100人を対象として算出した。亡くなった時期や場所が不明となっている戦没者も一定数いるため実態を反映していない可能性もあるが、5月27日の南部撤退以降に南部での戦没者数が増加していることがわかる。

2.5 司令部の南部撤退によりもたらされたもの

第32軍は南部撤退の際に住民の非戦闘地域への避難を徹底しませんでした。これにより、南部では極端な軍民混在の状態が生まれ、米軍の無差別的な掃討戦に巻き込まれ住民の犠牲者は一気に増えました。また、日本兵による避難壕追い出しや食糧強奪、スパイ嫌疑による虐殺などもおこりました。

一般住民の避難地区に軍主力が撤退するというこの決定こそが、軍人よりも一般住民の犠牲者が多いという沖縄戦の悲劇を生み出した最大の原因でした。このように、第32軍司令部壕は沖縄戦における戦闘を指揮しただけでなく、住民の犠牲を拡大させた南部撤退の決定がなされた重要な場所となりました。

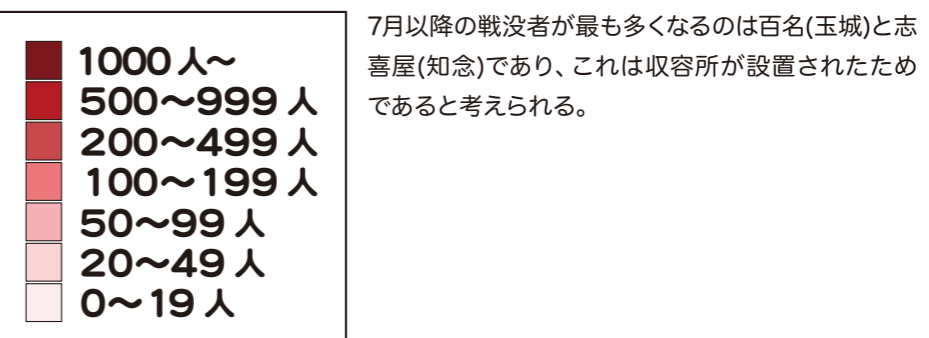
◀沖縄県出身者の南部戦没地
出典: 北上田源「平和の礎の戦没者情報から読み解く沖縄戦の実相(2)」(2026)



南部の字単位での戦没地の傾向を可視化した図。対象としているのは、南部で亡くなった沖縄県出身の戦没者のうち、亡くなった場所が字単位で、亡くなった時期が時期が月単位でわかっている約46,700人。1945年(昭和20年)4～6月の単月と、7月以降の各字での戦没者数を地図上に色分けして示している。濃いほどその字での戦没者が多いことを示す。4～6月にかけて戦没者が多くなる字が南部の中でもより南の方に徐々に移り替わっていく様子がわかる。加えて、5月以降に南部での戦没者が大きく増加していることが示されている。

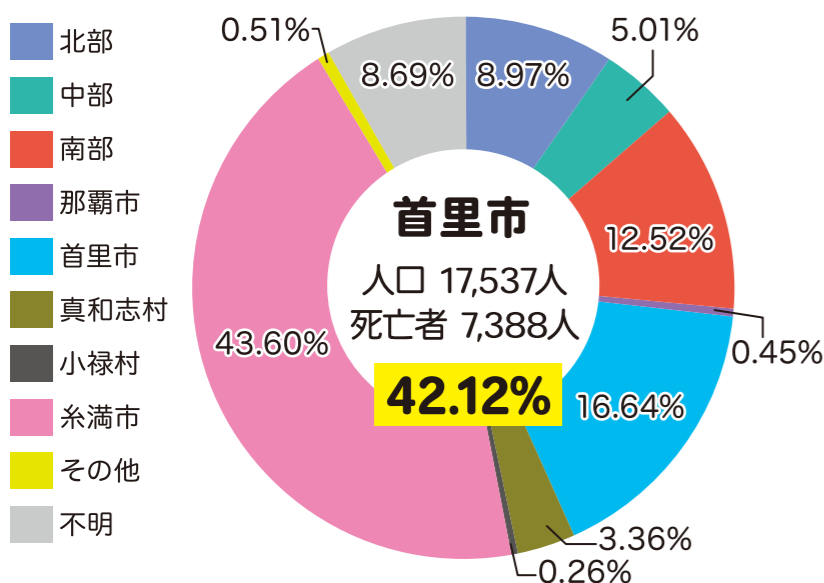
●糸満市域で6月に戦没者数が1000人を超えるのは新垣、国吉、真栄里、真栄平、真壁、摩文仁、米須、喜屋武である。糸満市の中でも南部に集中しているのは間違いはないが、それでも最南端に集中しているわけではないことは特徴的である。

●糸満市域以外で特徴的な字として、与那原町与那原、南風原町津嘉山、大里村大城(現在の南城市大里大城、真境名、稲福など)が挙げられる。これらの字では、4月～6月まで全時期を通じて一定数の人が亡くなっている。詳細はわからないが、交通の要所となり多くの人がこれらの字を通過したのではないかと考えられる。



7月以降の戦没者が最も多くなるのは百名(玉城)と志喜屋(知念)であり、これは収容所が設置されたためであると考えられる。

2.6 首里の戦争被害



▲首里市の戦死者数と死亡地

※戦死者の数は、「平和の礎」刻銘数を元に、死亡地が沖縄県・不明、死亡年が1945年・不明にしぼって抽出した。死亡地が不明でも死亡番地や字区分等で県外とわかるものはのぞき、字区分等に市町村名が記されている場合は当該市町村に含めた。また1940年(昭和15年)国勢調査による人口を参照として用いた³。

第32軍司令部のある首里市(当時)は、1945年(昭和20年)3月末から米軍の猛烈な攻撃があり、多くの住民は早い時期に南部方面に避難しましたが、残っていた住民もいて戦闘に巻き込まれました。古都首里は一面焼け野原となり、首里城も焼失しました。残ったのは県立第一中学校の校舎と首里教会の残骸だけといわれています。

岩本兼一さん「県立二中最後の五年生島尻敗走の記」より抄録(当時18歳、県立第二中学校5年生)

3月25日、晴。慶良間沖の米機動部隊は朝から艦砲射撃を始めた。中頭や島尻の飛行場を狙っているのか、首里は割と平穏。
 3月31日、晴。首里市内への砲撃日増しに激しくなる。家々も潰れて道にはみ出し、通行が不便になる。
 4月1日、曇のち晴。朝から首里の軍の動きがあわただしくなる。夜に入ると、避難民が虎頭のワイタイから続々と抜けてくる。昨日までは国頭疎開のため宜野湾へいくのが多かったのに、たずねてみたら北谷あたりに敵軍が上陸、道路が封鎖されているとのこと。
 4月3日、曇。敵部隊は普天間大山まで進出したという。この日の夕方、儀保通りを若い米兵が後ろ手にしばられたまま引立てられていった。宜野湾の手前で捕えた偵察兵らしい。
 4月4日、曇。砲撃は南風原、小禄飛行場あたりから、宜野湾、浦添、西原に廻り、首里の周囲は全く戦場と化した。残り少ない首里の名家は火と煙に包まれ、一夜にして瓦礫の山になってしまった。
 4月5日、曇。首里はいよいよ危険になったので、義兄の勤める与儀の農事試験場へ避難することにした。夕刻、儀保出発。山川の三差路はコンクリートの県道だが、もの見事に掃鉢形の大穴で切断されていた。艦砲の威力を知ったのはこれが初めてだった。
 4月20日、曇。朝、首里に出かける。首里金城町は前線とは反対の南向きにあるので、住民もそのまま屋敷におり、何とんでも司令部のお膝元なので活気がある。首里の外郭陣地で我が軍は一步も退かず奮戦中とのこと。道理でこの辺りは安泰なのだと思いつつ家へ帰った。ところが与儀では大変なことがおきていた。屋敷で義兄が艦載機の機関砲で負傷、左手の指四本を切断されていた。出血甚しく義兄は弱っていたが、薬品もなく、手当のほどこしようもなかった。
 4月30日、小雨。首里司令部まで情報をききに行く。五月には総攻撃もあるらしい。先に志願した学徒隊は、一応軍服を着けて首里の町を駆け廻っている。小学校同期の女生徒も、高女は四年卒業だから、卒業と同時に軍需部あたりに志願して軍属になっていた。新しい軍袴、軍靴を履いて颯爽と歩く彼女らを見ると乞食同然の自分のほろ制服姿が情けなかった。
 5月1日、曇多く時々俄雨。首里周辺猛爆撃。
 5月19日、曇。天久の高射砲陣地の辺りから安里、首里、虎頭まで直線に山が燃えている。白煙黒煙が入り交って天高く舞い上がり、その煙の前後を観測機が数機出たり入ったりしている。夕刻、与儀の農事試験場官舎を出て県庁壕へ向う。義兄の墓を一目見たいという父の願いからである。繁多川到着は夜だった。
 (出典：那覇市企画部市史編集室『沖縄の慟哭 市民の戦時戦後体験記(1-戦時編)』p314-319)

嘉手納宗徳さんの証言(当時31歳、久茂地小学校職員)

「ここにいっても何だから首里に行こうかと話した。やはり考えが少し浅かったね。首里は最後の陣地だろうと思ったんです。首里が陥れば、もう沖縄全部占領される。それで首里と共に死んだ方がいいんじゃないかと考えたんです。山原行こうか、どこへ行こうか、最後に残るのは首里である。だから首里が落とされたら、沖縄は完全に占領だ。首里へ行こうと決めたんだね。」
 (出典：『沖縄県史第9巻各論編8沖縄戦記録1』p743)

喜名祥介さんの証言(当時39歳、勤労働員係)

「首里の崎山の下に一週間ぐらいいましたですね。そこへ突然兵隊たちがきて、軍が使うから出るといって入り込んできてですね。私らはやむを得んから、すぐには行かれないからちょっとの間だけ置かせてくれと頼んだんですが、兵隊がいうには、天長節を期してですね、反撃する作戦があるから、その時は跳ね返すからそれまで我慢してくれなといつてね。結局は、私らをなだめているわけですね。そういわれて、こっちとしては、これはもういけなないと思いましたね。」
 (出典：『沖縄県史第9巻各論編8沖縄戦記録1』p418-419)

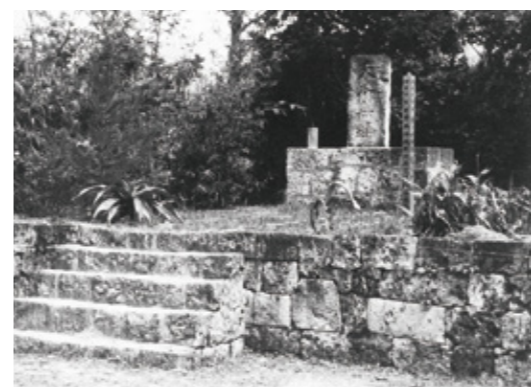
宇良宗徳さんの証言(当時27歳、首里市役所職員)

「疎開命令が出たのは(昭和)二十年に入って間もなくだったと思います。戦争に入ってから間もなく新設された県の人口課(浦崎純課長)から各市町村に指示があつて、首里は羽地村、今帰仁村に割り当てられました。(中略)
 首里に艦砲が打ちこまれたのは三月二十七、八日ごろだったと思います。その後四月二十四日に、首里住民に避難命令がでました。そのときは警察官が二人、軍命令を持って市長のところへきました。市長は儀保の割といの壕におりました。市の職員とその家族も一緒に同じ壕に避難していたのです。避難命令で北部方面に疎開する人たちも大勢いましたが、首里に残っていた人も少なくなかったですね。そうですね、艦砲が打ちこまれてからはみんなちりぢりになり南部に退がる人も多かったように思います。」
 (出典：那覇市企画部市史編集室『沖縄の慟哭 市民の戦時戦後体験記(1-戦時編)』p552-553)

長嶺孝子さんの証言(当時15歳、学生)

「(具志頭村の)後原の字から若い女性が三十名あまり出されて、首里の方まで、弾薬の箱を頭に載せて運搬したんです。(中略)その後また、友軍から、首里は弾薬が不足しているから一人でも二人でもいいから弾薬を届けるようにという指令がぐだつてですね、私たちはまた行ったんです。そして途中で、砲弾の雨に逢っては引返してきて、また行って…くり返し五回も歩いて運搬したんですよ。」
 (出典：『沖縄県史第9巻各論編8沖縄戦記録1』p821-822)

首里にあった慰霊塔「天衣無縫」

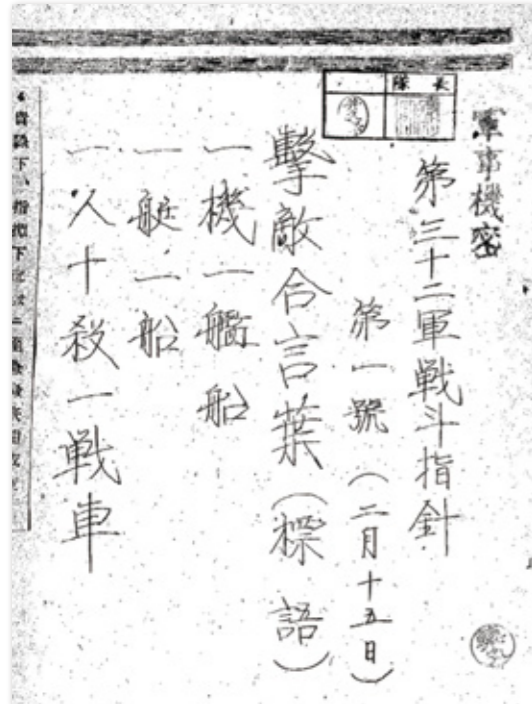


1945年(昭和20年)12月、住民の首里への移動が始まり、先遣隊による街の復興とともに遺骨は収集されました。1952年(昭和27年)4月の引揚援護庁復員局による「沖縄墓地一覧表」⁴には、首里市当蔵区の万松院の「天衣無縫ノ塔」に「5000以上」の遺骨が納められていることが記されています。
 山城善三『慰霊塔案内』(1970年)によると、市民は戦後、累々と重なる「名も知れぬ軍人、軍属、老幼男女の白骨」を集め「お茶屋御殿に仮納骨堂を建立」したとあります。しかし、この地にキリスト教会が設立されることになり遺骨の撤去を命じられたことから、万松院が「市当局より500円の補助を受けるとともに、区長達の援助の下に寄附金を集め、およそ2万4000円と当蔵町学童30名の奉仕により」、1951年(昭和26年)7月中旬に万松院境内に「天衣無縫之塔」を建立したとのこと。
 遺骨は1973年(昭和48年)ごろに那覇市識名の「戦没者慰霊之塔」へ移され(「戦没者中央納骨所」を指すと思われる)⁵ 現在、この慰霊塔はありません。いつまで存在したのかなど詳細は不明です。

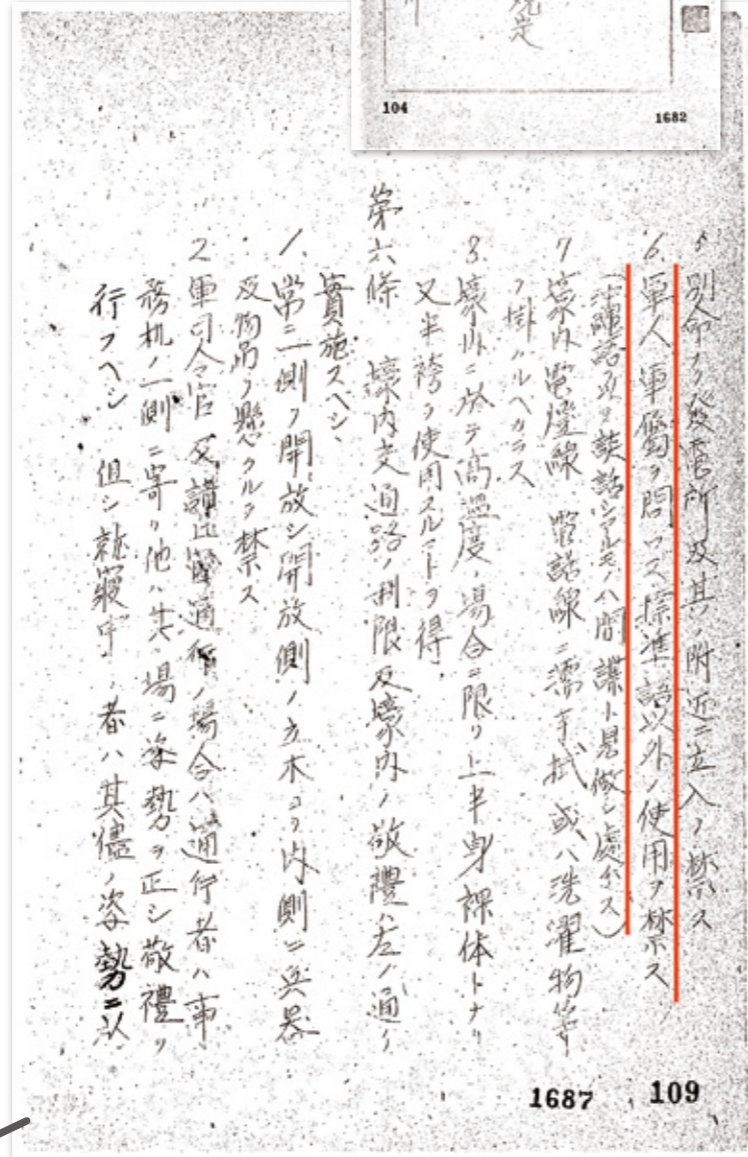
2.7 日本軍関連の一次資料

「第32軍戦闘指針第一号」は1945年(昭和20年)2月15日に日本軍第32軍が発令した沖縄戦における指示文書で、航空機は艦船1隻、特攻艇は船1隻、歩兵は10人殺害、戦車1台を撃破目標とする撃敵合言葉(標語)が記されていました。

「天ノ巖戸戦闘司令所取締二関スル規定」は、第32軍参謀長の長勇が作成した文書で、司令部壕内の各部隊の内部管理について定められています。

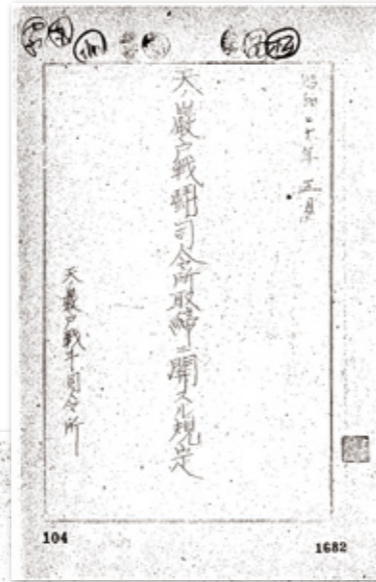


▲第32軍戦闘指針第1号 [1945年(昭和20年)2月15日] / 出典: 防衛研究所



▲第32軍参謀長長勇作成「天ノ巖戸戦闘司令所取締二関スル規定」 [1945年(昭和20年)5月5日] より / 出典: 防衛研究所

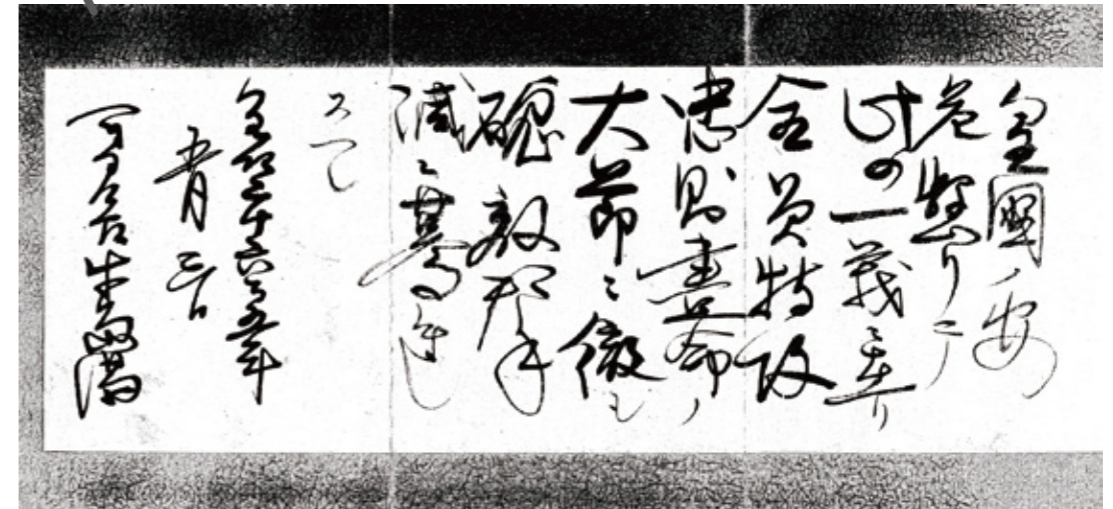
「天ノ巖戸戦闘司令所取締二関スル規定」の中には、「軍人軍属を問わず標準語以外の使用を禁ず(沖縄語を以て談話しあるものは間諜と見做し処分す)」という内容も記されています。標準語ではない言葉、とりわけ沖縄語を使用した者は間諜、つまりスパイとみなすという意味です。このような命令は、多くの沖縄住民が日本軍によってスパイとみなされ、虐殺されるといった悲劇的な結果を招きました。



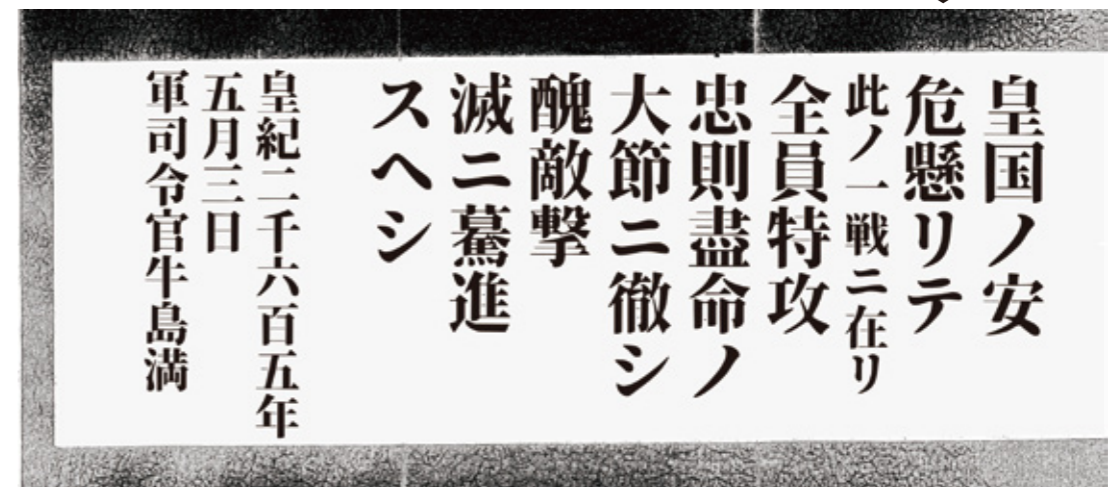
1945年(昭和20年)5月3日、翌日の総攻撃に際して、第32軍司令官の牛島満中将が発した訓示です。「皇国ノ安危懸リテ此ノ一戦ニ在リ」は、「この戦い(沖縄戦)は日本の存亡に関わるほどの重要な戦いである」と示しています。「全員特攻忠則盡命ノ大節ニ徹シ醜敵撃滅ニ慕進スヘシ」は、「国(天皇)への忠義のために全員が生きて帰らない覚悟で戦い、醜い敵へ回復不能な損害を与え続けよ」と鼓舞する内容です。



▲牛島満/牛島貞満氏提供



▲第32軍司令官牛島満中将訓示 [1945年(昭和20年)5月3日] / 出典: 防衛研究所



▲第32軍司令官牛島満中将訓示を文字起こしたものの「皇紀」とは、初代天皇の神武天皇が即位したとされる年を元年とする日本独特の年の数え方。1940年は皇紀2600年に当たるとして、国を挙げて全国各地で祝賀行事が行われた。

2.8 第32軍司令部関連年表

1944年（昭和19年）

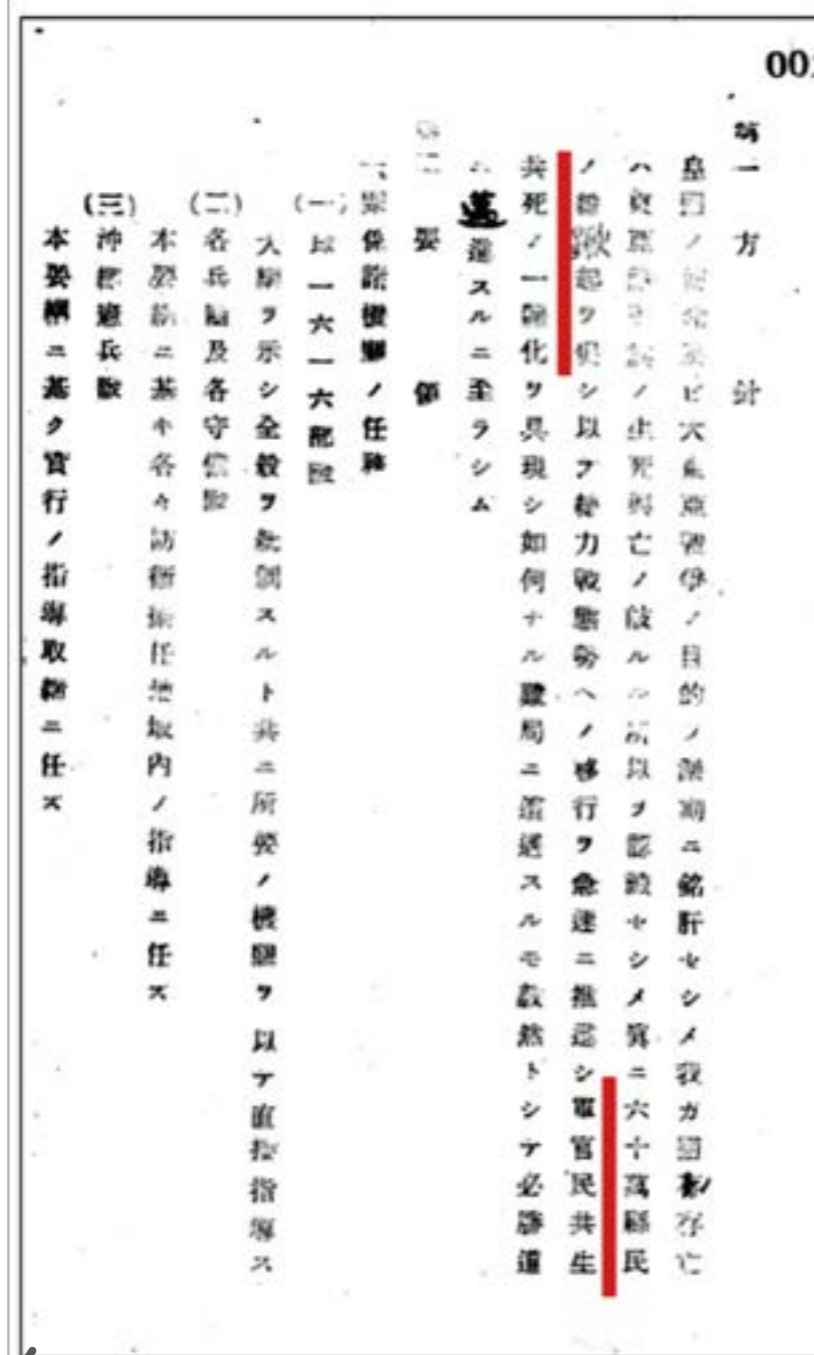
- 3月22日 大本営、第32軍を編成
- 3月25日 第32軍司令部、福岡で編成を開始
- 4月2日 第32軍司令部を真和志村松川の蚕糸試験場に置くことを決定
- 8月10日 牛島満司令官着任
- 9月 南風原村津嘉山で、戦闘司令所の構築を開始 読谷山村石嶺久得で、軍予備戦闘司令所の構築を開始
- 10月10日 十・十空襲（米軍機による南西諸島空襲）
- 12月3日 司令部を首里に置くことを決定 翌年1月中旬までに移転できるように準備を命じる
- 12月9日 首里城地下で第32軍司令部壕の構築を開始

1945年（昭和20年）

- 1月21日 司令部を首里の沖縄師範学校内に移転
- 2月15日 「第32軍戦闘指針」を公表 「一機一艦船、一艇一船、一人十殺一戦車」の特攻作戦の発令
- 3月23日 米軍、南西諸島全域を空襲 第32軍司令部、首里城地下の第32軍司令部壕に入る
- 3月26日 米軍、阿嘉島・座間味島・慶留間島に上陸
- 4月1日 米軍、沖縄島中部西海岸に上陸
- 5月4日 日本軍、総攻撃に出るが苦戦 翌日、攻撃を中止
- 5月5日 第32軍、「天ノ巖戸戦闘司令所取締二関スル規定」を定める
- 5月22日 「新作战計画」を策定し、喜屋武半島に撤退することを決定
- 5月27日 第32軍司令部壕を放棄、津嘉山に移動
- 5月30日 第32軍司令部、津嘉山から摩文仁に撤退
- 5月31日 米軍、首里を占領
- 6月19日 第32軍牛島司令官、「爾今各部隊は各局地における生存者中の上級者之を指揮し 最後迄敢闘し悠久の大義に生くべし」の命令を下達
- 6月23日 第32軍牛島司令官、長参謀長自決（6月22日の説もある） 第32軍の組織的戦闘の終了
- 9月7日 米軍第10軍司令部（越来村森根）で降伏調印式

※戦闘としての沖縄戦はほぼ終わったが、投降せずに翌年まで山中に潜伏し続けた部隊もいた。島々や本島の民間人収容地区では飢えとマラリアによる被害は続いていた。また多くの住民が郷里に帰ることができないままだった。

『秘密戦二関スル書類』に綴られている、第32軍「報道宣伝防諜等に関する県民指導要綱」（1944年11月18日）。防諜対策の極秘文書で、国頭国士隊が保管していました。沖縄戦で米軍に押収されましたが戦後日本に返還されました。現在は国立公文書館に所蔵されています。



▲秘密戦二関スル書類／出典：国立公文書館

「真に60万県民の総決起を促し、もって総力戦態勢への移行を急速に推進し**軍官民共生共死の一体化**を具現しいかなる難局に遭遇するも毅然として必勝道に邁進するに至らしむ」

「県民をして積極的に軍に協力すると共に絶対に軍に信頼し、いかなる事態に遭遇するも動揺混乱することなく…」

「個人生活は国家と共に存することを知らしめ総てを戦争完遂の一途に集中し、もって敵愾心を旺盛ならしめ奉公心を昂揚せしむ」
（『沖縄県史資料編23 沖縄戦日本軍史料沖縄戦6』2012年p696）

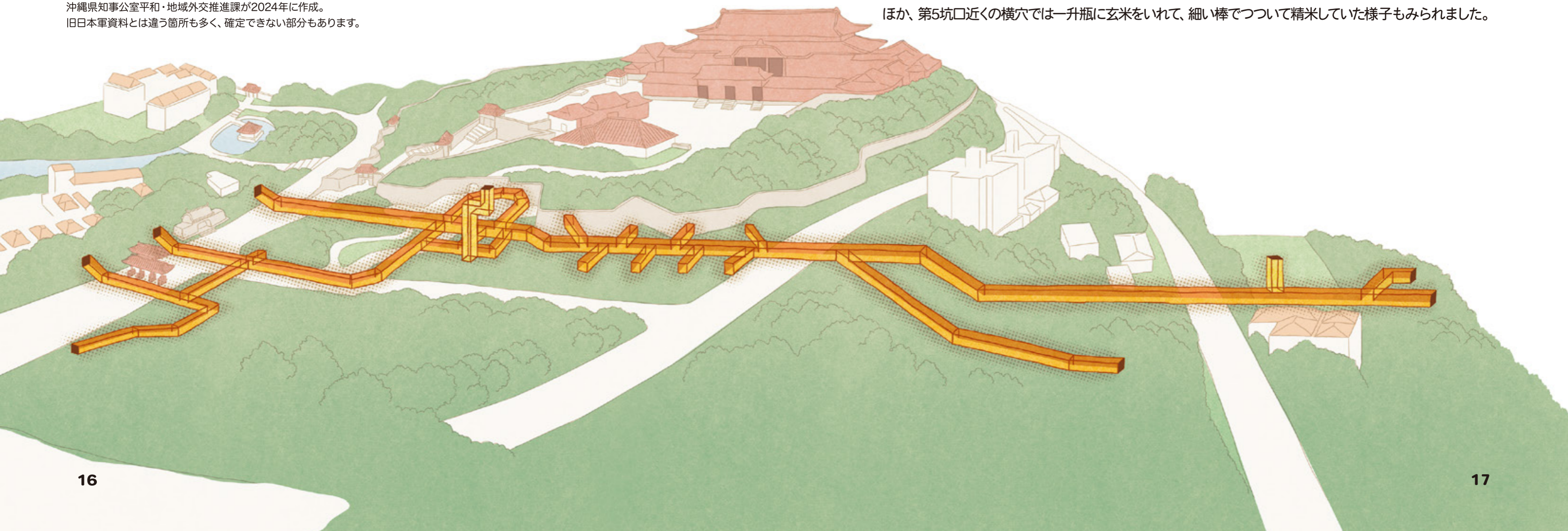
3.1 第32軍司令部壕の構造

第32軍司令部壕は、沖縄県内の地下壕の中でも屈指の規模を有しています。首里城が立つ丘の地下約10～30mを南北に貫通し、直線距離にして約375m、壕の総延長は約1,000mと推定されています。しかし、壕の一部が埋没しているため、詳細については解明されていない部分が多くあります。主となる坑道とそこから複数の坑道が枝分かれし、北側に3か所、南側に2か所の坑口があります。また、将校室をはじめ参謀室、軍医部、救急所、通信部、作戦室、電信部など多くの部屋が配置されていました。壕内の天井や壁面は岩盤を粗く削って掘り込んでおり、壁面にはツルハシなどによる無数の掘削のあとが確認できます。また、床面の一部には現在も、枕木が敷かれているのを確認できます。天井部分には地上へつながる立坑も数か所あったとされ、おもに連絡道や通気孔として機能していました。

現在は、壕内の崩落防止と保全のために1994～1995年度に設置した鋼製の支保工（補強用の仮設構造物）が残っています。

▶第32軍司令部壕の地下イメージ

本図は、米軍が沖縄戦直後に調査をおこなってまとめたIntelligence Monographに基づいて沖縄県知事公室平和・地域外交推進課が2024年に作成。旧日本軍資料とは違う箇所も多く、確定できない部分もあります。



3.2 第32軍司令部壕から見つかった遺物

第5坑道からは、大きく分類して5種類の遺物が発見されています。



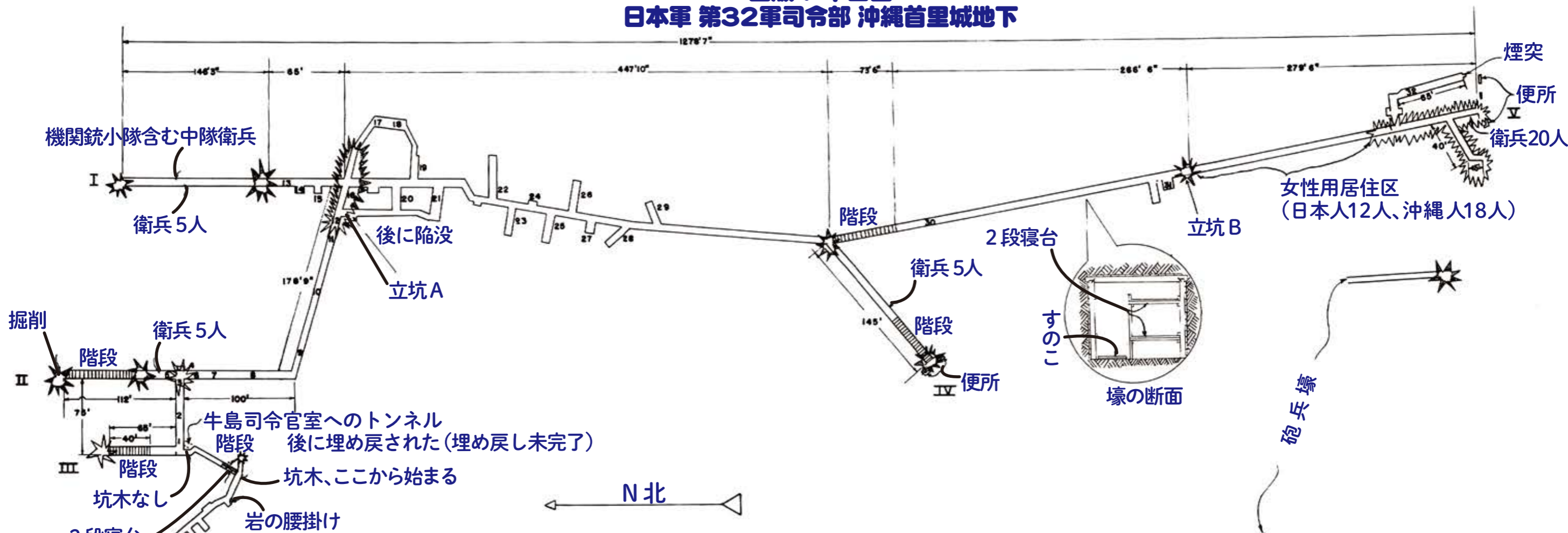
写真引用：【沖縄県平和祈念資料館所蔵】

- ① 通信装置
(通信機、受話器、
バッテリーなど)
- ② 壕掘り作業道具
(ツルハシなど)
- ③ 日用品
(一升瓶、お椀など)
- ④ 医療品
(薬品瓶など)
- ⑤ 武器
(小銃、
火炎放射器など)

第32軍司令部壕では、他の陣地壕跡では見られない通信機器類が確認できることから、情報を取り扱う施設としての戦略的・戦術的に重要な役割があったと推測できます。また、簡易的な救急所があったほか、第5坑口近くの横穴では一升瓶に玄米をいれて、細い棒でついて精米していた様子もみられました。

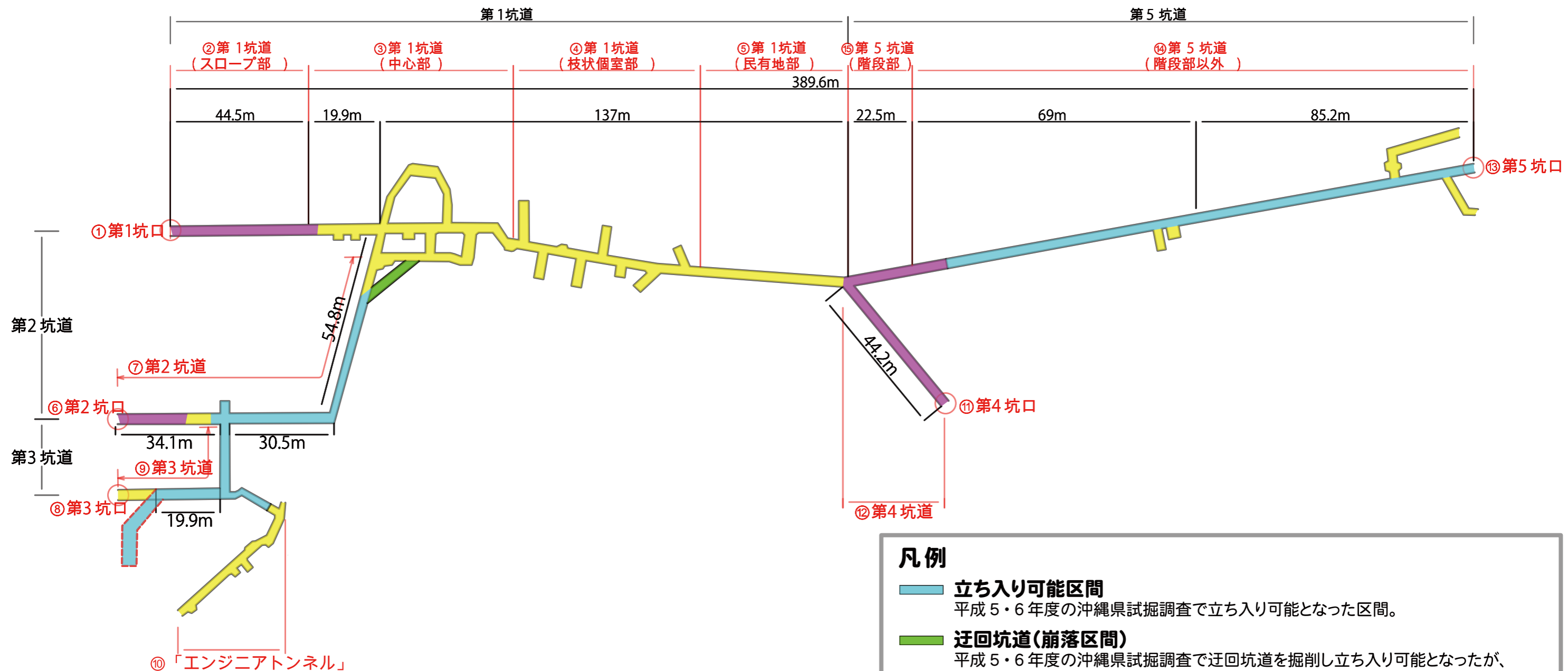
3.5 米軍作成の壕内図(インテリジェンス・モノグラフ)日本語訳

図版7 平面図
日本軍 第32軍司令部 沖縄首里城地下



部署名	高さ	幅	長さ	部署名	高さ	幅	長さ
1 軍司令官室	6'2"(188cm)	4'10 1/2"(148.59cm)	約20'(約609.6cm)	22 第32軍電信補給部	6'2"(188cm)	7'(213.36cm)	40'(1219.2cm)
2 参謀長室	"	"	"	23 独立混成第44旅団情報部	"	"	25'(762cm)
3 参謀室	"	"	"	24 救急所	"	5'(152.4cm)	7'(213.36cm)
4 高級副官室	"	"	6'6"(198.12cm)	25 第32軍航空情報部	"	"	25'(762cm)
5 書記官・伝令	"	"	約20'(約609.6cm)	26 軍医部	"	"	30'(914.4cm)
6 作戦室	"	"	約15'(約457.2cm)	27 将校室	"	"	10'(304.80cm)
7 元は独立混成44旅団司令官室 後に女性タイピスト10人の居室	"	"	約20'(約609.6cm)	28 陣地構築部	"	6'(182.88cm)	20'(609.6cm)
8 食料貯蔵庫	"	"	"	29 軍医室	"	"	"
9 電信部	"	"	約35'(約1066.8cm)	30 独立混成第44旅団参謀室	"	6'5"(195.58cm)	約15'(約457.2cm)
10 気象部	"	"	"	31 海軍陸戦隊司令官 (大田少将) 1945年5月10-17日	"	"	10'(304.80cm)
11 物資・兵員部	"	"	"	32 炊事場	"	6'(182.88cm)	65'(1981.2cm)
12 搜索部	"	"	約20'(約609.6cm)				
13 通信部	"	6'6"(198.12cm)	約15'(約457.2cm)	A B 2次入口と換気口			
14 電話交換器	"	7'(213.36cm)	7'(213.36cm)	2次トンネル	6'2"(188cm)	4'10 1/2"(148.59cm)	
15 将校室	"	"	"	I-V 入口			
16 命令下達所	"	4'10 1/2"(148.59cm)	約20'(約609.6cm)	主トンネル	6'2"(188cm)	6'6"(198.12cm)	
17 第32軍情報部	"	10'(304.80cm)	15'(457.2cm)	★ 爆破地点 (通行不可)			
18 第24師団作戦部	"	"	10'(304.80cm)	☆ 爆破地点 (通行可能)			
19 第24師団作戦部	"	6'(182.88cm)	20'(609.6cm)	※ およその数字			
20 第24師団師団長	6'8 1/4" (203.8cm)	7'10"(238.76cm)	20'2"(614.68cm)				
21 第24師団将校	"	10'(304.80cm)	30'(914.4cm)				

3.6 沖縄県の調査による現況の壕内図



凡例

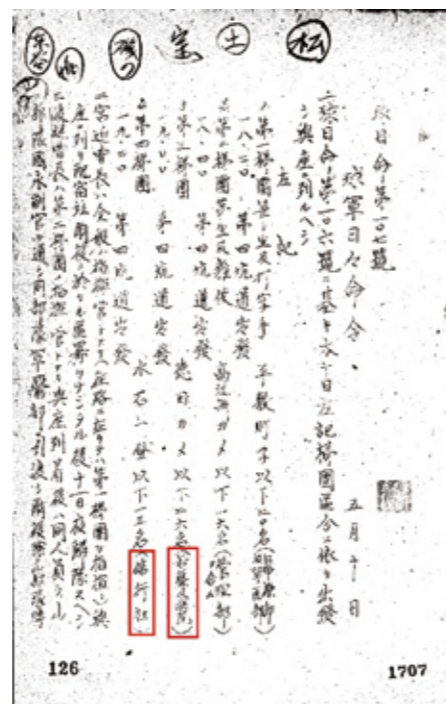
- **立ち入り可能区間**
平成5・6年度の沖縄県試掘調査で立ち入り可能となった区間。
- **迂回坑道(崩落区間)**
平成5・6年度の沖縄県試掘調査で迂回坑道を掘削し立ち入り可能となったが、崩落による閉塞で立ち入りができなくなった区間。
- **立ち入り不可区間**
米軍により調査済みだが崩落による坑道閉塞が推測される区間。
- **実態不明区間**
米軍による調査も実施されておらず、試掘調査も実施困難であり実態が不明な区間。

令和4・5年度詳細調査により、第1坑道スロープ部(実態不明区間)及び第1坑道中央部(立ち入り不可区間)でボーリング調査等を実施した結果、坑道位置を特定できたが、内部は崩落し、閉塞していることを確認した。壕内図は、1945年米軍作成の『インテリジェンス・モノグラフ』に収録された図を参照している。

3.7 第32軍司令部壕に関する証言

第32軍司令部壕に関する当時の証言は限られており、特に壕の中心部分における状況についてはほとんど証言が得られていません。壕内には1,000名以上がいたとされ、多くの人が狭い壕内を行き交い、現地召集兵は膝を立てて睡眠を取っていたとされています。また、その中には女子雇用人もおり、第32軍司令部の陣中日誌では、司令部が南部撤退を正式決定する以前に、女性たち75人を与座（現糸満市）へ移動させる命令が記録されています。女性たちは「筆生」（書記）や「打字手」（タイピスト）「若藤及び病院」や「偕行社」に所属していたことが確認できます⁶。

壕の内部は蒸し暑く、悪臭が充満していたとの証言もあります。天井から多量の地下水が染み出していたため、坑道の脇に排水用の溝が掘られ、水を外へ出すような工夫が施されていました。それでも湧き水と泥に悩まされ、十字鍬やシャベルで壕外へそれらを掻き出していました。これらのことから、壕内の環境は決して良くなかったことがうかがえます。また、第5坑口近くに2基の発電機が設置され、近くの井戸水を冷却水として使用していたことから、壕内には電気が安定供給されていたようです。加えて発電機の近くには炊事場があり、食糧が山積みになっていたとのことです。



▲球日命第107号 [1945年5月10日]
／出典：防衛研究所

山内昌健さんの証言

「惣慶の負傷は決して楽観は許されなかった。食事をとることができず、3日間も熱が下がらず、果ては精神錯乱を起こし、狂人のように喚き散らす始末。このままでは生命にもかかわる大事であった。その日の夕刻、軍司令部壕第1坑道入口が敵艦砲炸裂により崩壊したため、その修復作業に我々がかり出されることになった。その時ついでに、軍司令部壕内の外科病棟に惣慶を移送することに話がまとまった。私たちは砲弾飛来の合間を縫って、惣慶を戸板に乗せて、降りしきる雨の中を師範学校記念運動場を横切って、運動場南面直下に掘られた壕の入口へ入って行った。惣慶清和は昭和20年5月27日、こめかみの傷が元で軍司令部外科病棟で戦死した。」

（出典：龍潭同窓会（1980年）『龍潭百年沖繩師範学校百年記念誌』p569-570）

城間期一さんの証言

「難工事のすえ坑道は貫通したが、われわれは軍司令部壕にはいることを許されなかった。離れたところから奥の方をのぞいてみると、こうこうと電灯がついているところがあった。その一帯は軍司令部首脳居室で「あそこが牛島中将の部屋だ」という者がいた。いかにも将官室にふさわしく、広々として立派な造りだった。」

（出典：兼城一（2000年）「沖繩一中・鉄血勳皇隊の記録・証言・沖繩戦（上）」p127）

大田昌秀さんの証言

「壕の内部は至る所、頑強な松板で壁がはられ、丸太のままの支柱が一間おきくらいの間隔で立ち、洞窟戦闘指揮所としてはまさに鉄壁のものだった。第2、第3坑道は、それぞれ首里第二国民学校の運動場に入口があり、枝坑道によって、首里城の裏手の金城町に抜けている第四、第五坑道と連なっていた。参謀室付近の支柱の丸太には、『醜敵撃滅』

『必勝不敗』『撃ちてし止まん』等のはり紙が毎日のように目についた。長参謀長の直筆とのことだった。」

（出典：大田昌秀、外間守善（1953年）『沖繩健児隊』p9）

渡久山朝章さんの証言

「野戦築城隊の球10158部隊第2野戦築城隊に配属された一中隊から三中隊までの隊は、軍司令部洞窟陣地構築に当たった。米軍の上陸という事態に至っても、この陣地は未完成だったのである。外では砲爆撃の脅威と危険にさらされながらトロッコを押し、内では湧水と泥濘に悩まされ、落盤事故にあいながら、昼夜一途にショベルを握り十字鍬を振った。こうした中では、14、5歳の年少者といっても容赦はなく、召集兵たちと同様のノルマを課された。さらに、軍上層部の焦りは、そのまま築城隊への八つ当たりともなっていた。」

（出典：龍潭同窓会（1980年）『龍潭百年—沖繩師範学校百年記念誌』p579）

儀間昭男さんの証言

「5月27日、摩文仁へ撤退するその日まで軍司令部の壕は掘り続けられた。壕掘りも命がけだった。落盤事故があったり、掘り出した土石を外に運び出す作業など、砲爆下間髪を容れずトロッコを押ししていくのだから容易なことではなかった。」

（出典：沖繩師範学校龍潭同窓会（1986年）『傷魂を刻むわが戦争体験記』p144）

大田昌秀さんの証言

「壕を一步出たら寸時も保証できぬ生命だったが、私達は外へ出ていく任務をむしろ喜んだ。刻々と情勢が悪化するにつれて、用便も壕内でするようになり、壕内の生活は堪えられるものではなかった。しらみが服いっぱいだった。多くの人が狭い壕にうごめき、炭酸ガスと熱気が混じってむれかえり、その上鼻つく悪臭は避けようもなく、皆は争って壕口へつめかけた。狭い壕では身を横にすることもできず、膝を立てて眠るのがやっとだった。澄んだ空気が吸いたい。皆の欲望はこれにつきたといってもよかった。その点、任務を帯びて壕外を自由に飛び回れた千早隊員は幸せだった。」

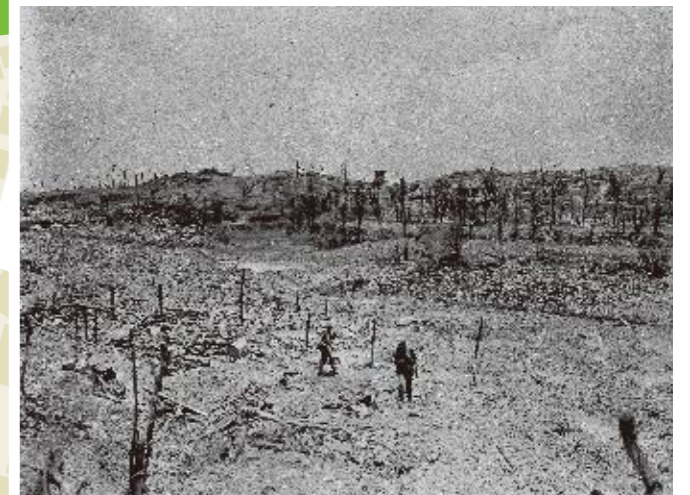
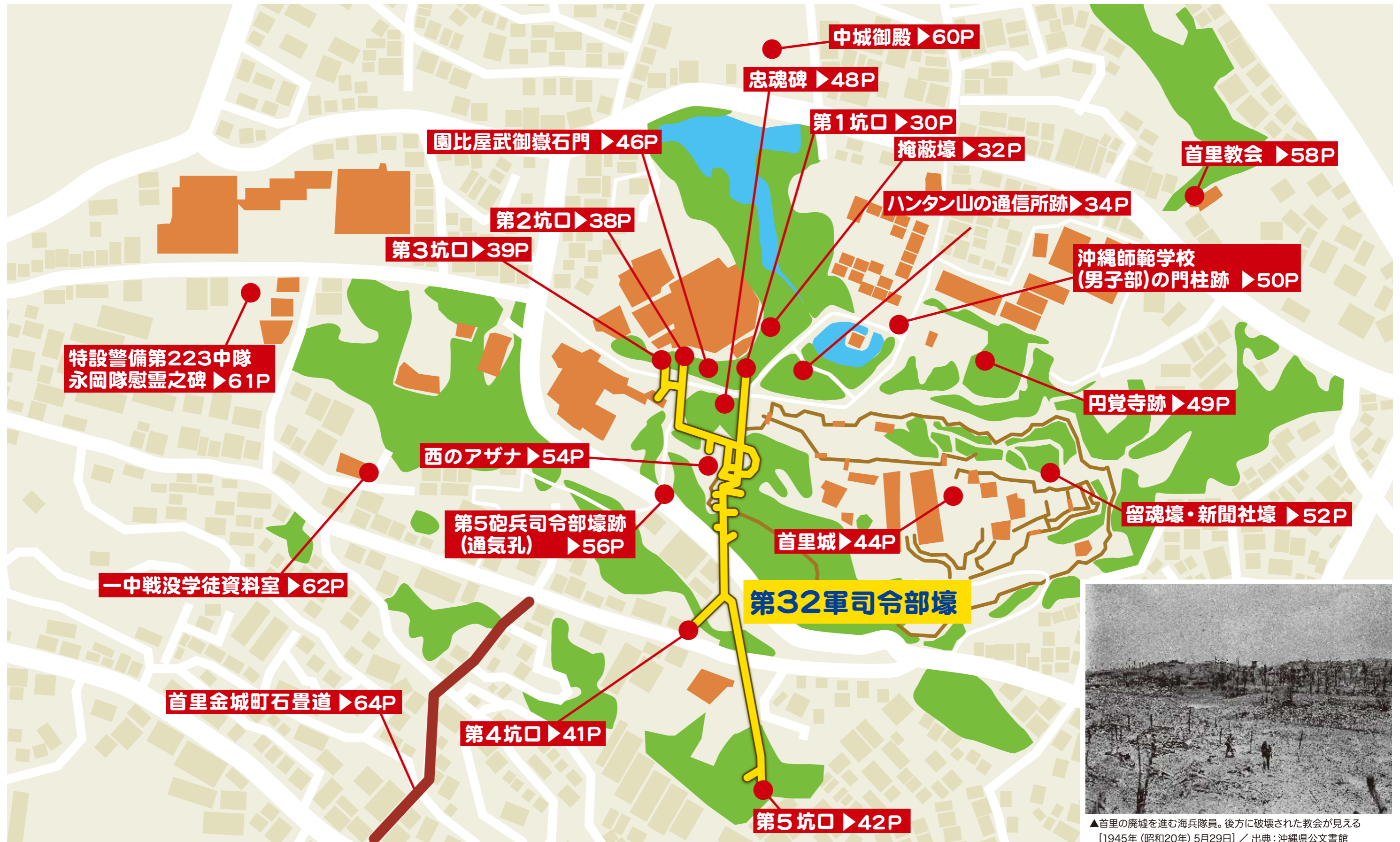
（出典：大田昌秀、外間守善（1953年）『沖繩健児隊』p14-15）

安里繁さんの証言

「軍司令部に毎日通っているうちに、野戦築城隊（駒場部隊）本部の将兵とも顔馴染みになった。特に某曹長とは親しかった。（中略）軍司令部に行くと、その曹長の寝台によく休ませてもらった。そして、カンメンポーや缶詰をもらったり、時には、砂糖入りの酒を水筒から飲ませてくれたりもした。」

（出典：大田昌秀、外間守善（1953年）『沖繩健児隊』p210）

第32軍司令部壕と関連施設、周辺のポイント



▲首里の廃墟を進む海兵隊員。後方に破壊された教会が見える
[1945年(昭和20年)5月29日] / 出典: 沖縄県公文書館

4 第32軍司令部壕内部と関連施設

4.1 第1坑口、坑道

第32軍司令部壕の正面出入口となり、掩蔽壕、通信所、留魂壕との連絡口とも密接に関連していました。



【場所、坑道の全長等】

園比屋武御嶽石門の背後にある掩蔽壕付近に第1坑口があります。ただし第1坑口から首里城歓会門方面に伸びる第1坑道は崩落等が原因で坑道の詳細な位置は不明です。米軍調査資料『インテリジェンス・モノグラフ』によると、第1坑道は約200mの長さとなっています。1994年度（平成6年度）の沖縄県の調査では、第1坑道と合流する手前の第2坑道から迂回坑道を新設し、壕の中央部分の調査が行われました。迂回坑道は第2坑道から30°右へ掘り進め、約17m進んだところで壕の中央部分の枝坑に到達しましたが、枝坑は流入土砂によって全面閉塞された状態で、それ以上の進入は出来ませんでした。

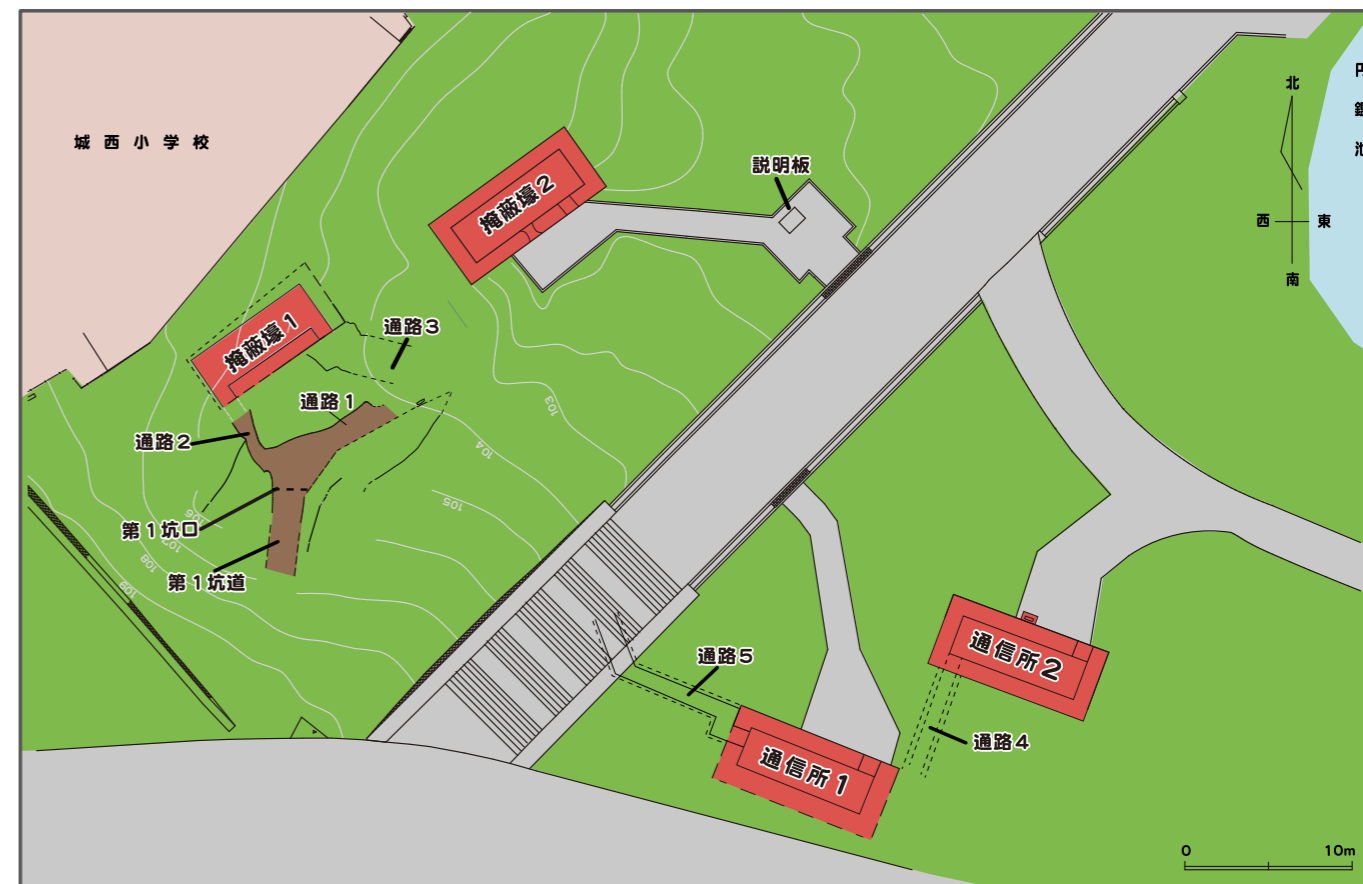
【戦中に有した機能】

第1坑道には、通信部、作戦部、情報部などが設置されていました。第1坑口付近にはハンタン山の中に通信部隊用のコンクリート製の建築物が複数構築され、坑口周辺から壕の中央部にかけて第32軍の情報網を担った通信部隊が配置されていました。また、米軍調査によると第1坑道の中央部分には第32軍のインテリジェンス関係部隊が配置されていたとされ、日本軍要図では航空情報部が配置されています。第32軍情報部がいたとされる場所では、壁面背後にある倉庫と思われるくぼみに、袋に入った機密書類が隠されていたのが米軍により発見されました。

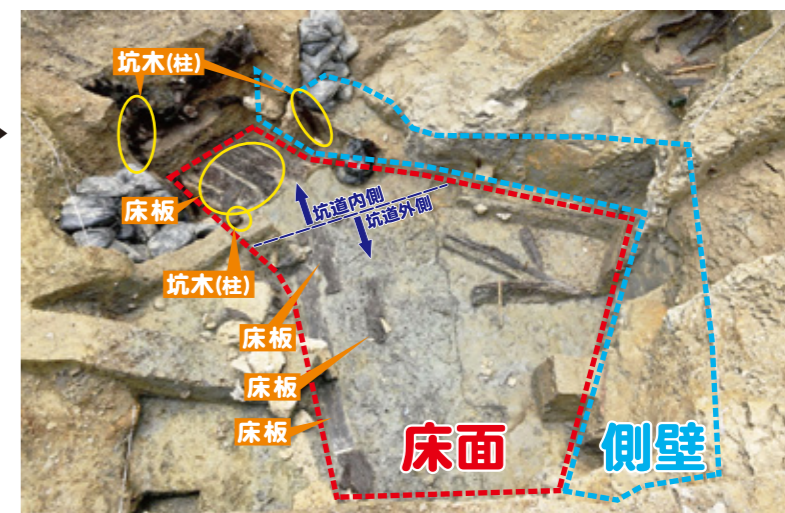
【現況（沖縄県調査に基づく）】

2023（令和5）年度及び2024（令和6）年度は沖縄県による発掘調査によって、第1坑口の床面や柱、床板等が出土し、第1坑口の正確な位置が特定できました。第1坑口の天井部分は既に崩落していましたが、最も重要な床面や支柱が保存されていることがわかったことは大きな成果と考えられます。また、物理探査・ボーリング調査によって、これまで正確な位置が把握できていなかった第1坑道の部分的な位置の特定と床面も確認できました。坑道内部の一部も天井は既に崩落していましたが、床面が保存されていることがわかったことは、第1坑口同様、大きな成果と考えられます。

2025（令和7）年度も沖縄県による発掘調査によって、第1坑口から、すでに存在が確認されている掩蔽壕や通信所跡に伸びる通路が新たに発見されたことにより、第32軍司令部壕の軍事的構造の一端が明らかになりつつあります。



▲第1坑口、掩蔽壕、通信所跡周辺の平面図



2024年度（令和6年度）▶
第1坑口発掘調査の状況

- 第32軍司令部壕（床面範囲）
- 第32軍司令部壕（側壁）

このポイントに関する証言

大田昌秀さんの証言

「私たちの出入りする第1坑道は、師範学校前面の弁財天池の方に開け、守礼の門の下を通過して西方に伸び、更に東西南北に枝坑道が走って、それらは結び合っていた。第1坑道に入っていくと、壕の中ほどに司令官室を始め各参謀室や作戦室、情報室等の部屋が、地上の建物のように独立してあった。そこには要員だけでも1,000人以上の者が入っていた。」

（出典：大田昌秀、外間守善（1953年）『沖縄健児隊』p9）

えんぺいごう
4.2 掩蔽壕

第1坑口近くに残されている掩蔽壕で、2か所あります。ふたつとも坑口とは別の構造物です。第1坑口から離れた掩蔽壕には、壁の上部に銃弾の跡が残っています。物資の保管や爆撃時に避難をするために使われたとみられています。



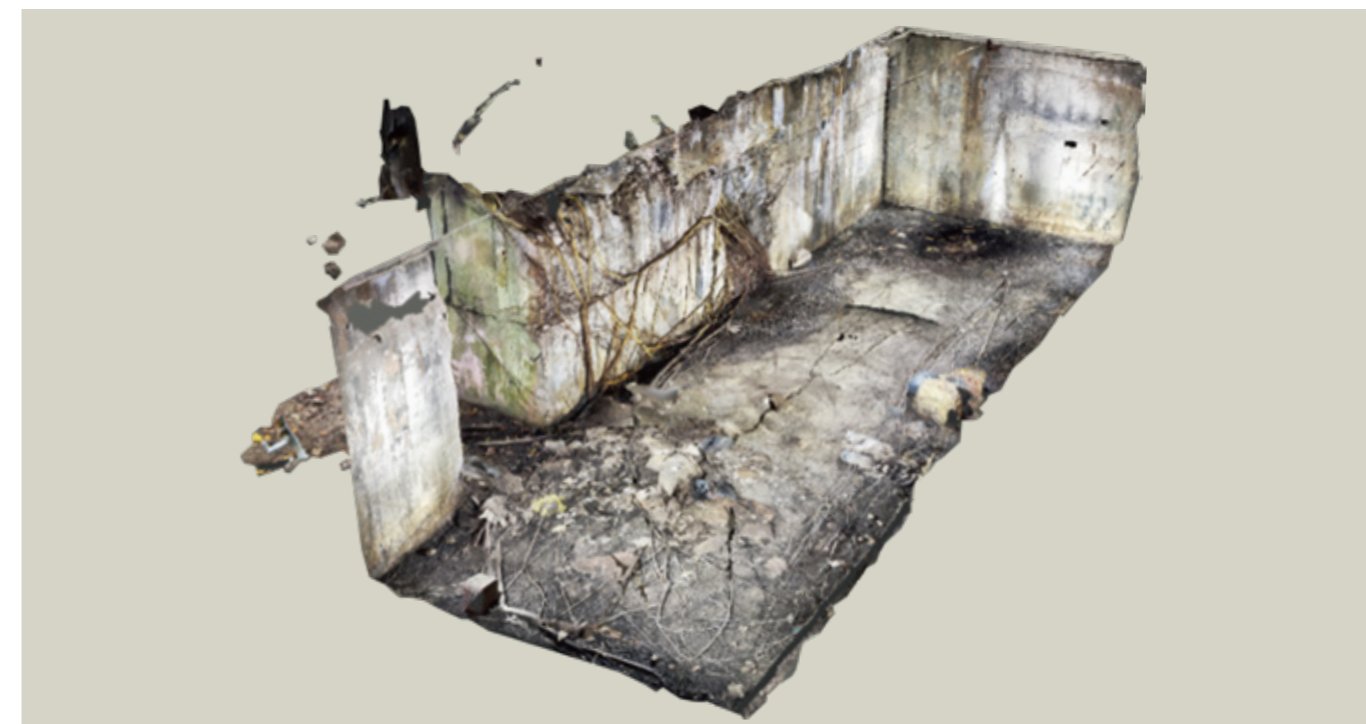
第32軍司令部壕に関連する軍事施設と考えられますが詳細は不明です。物資を一時的に保存する際に使用されたほか、シェルターとしても使用されたのではないかと考えられています。厚さ1mのコンクリートで造られ、内部の高さも2mほどあります。外壁には当時の弾痕が残っています。



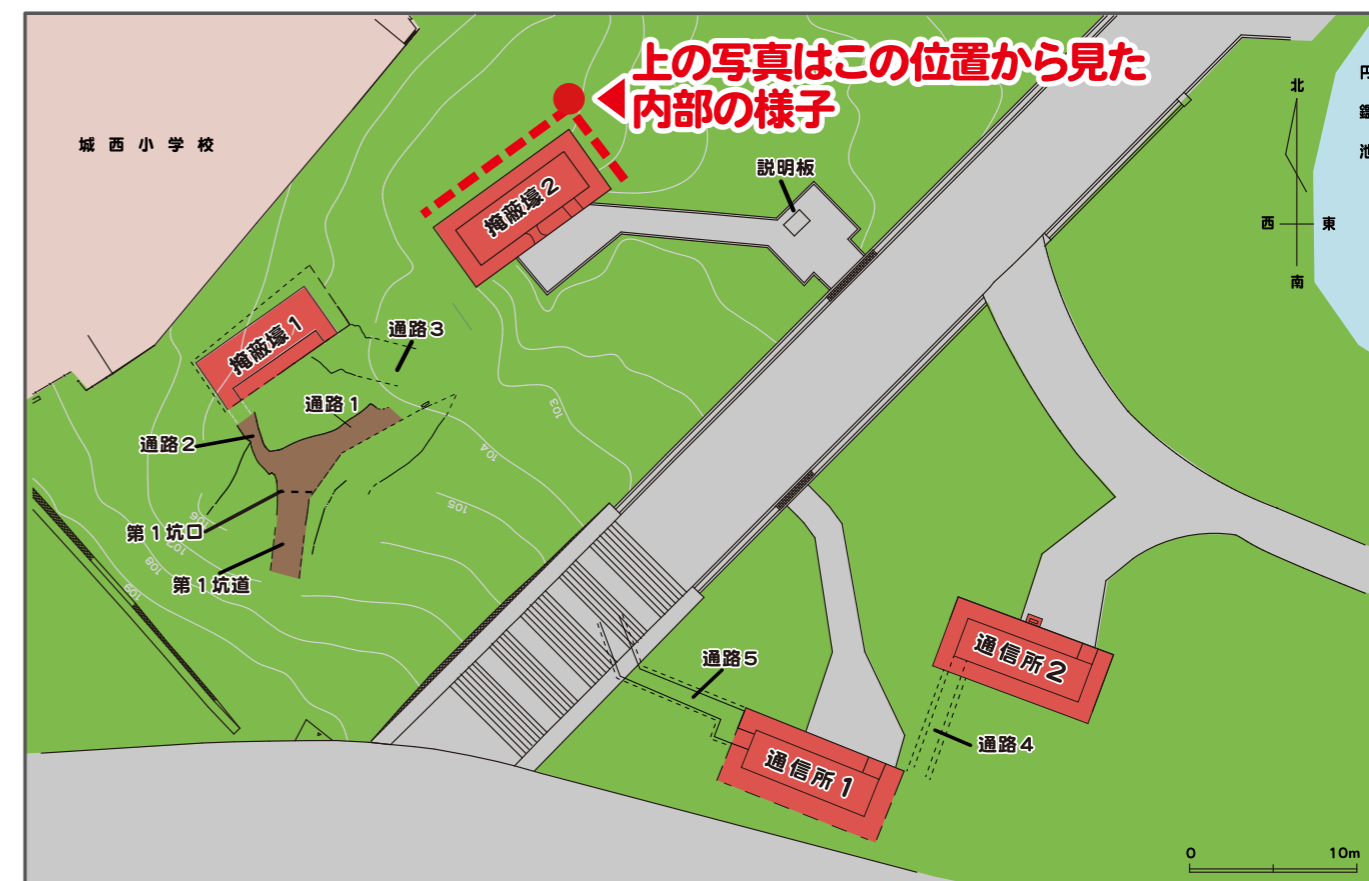
▲掩蔽壕の現在の様子。砲弾の跡にガジュマルが生えている。



▲戦後に撮影された掩蔽壕 [1961年 (昭和36年) 2月4日]
／出典：那覇市歴史博物館



▲掩蔽壕2の内部 (北東から)



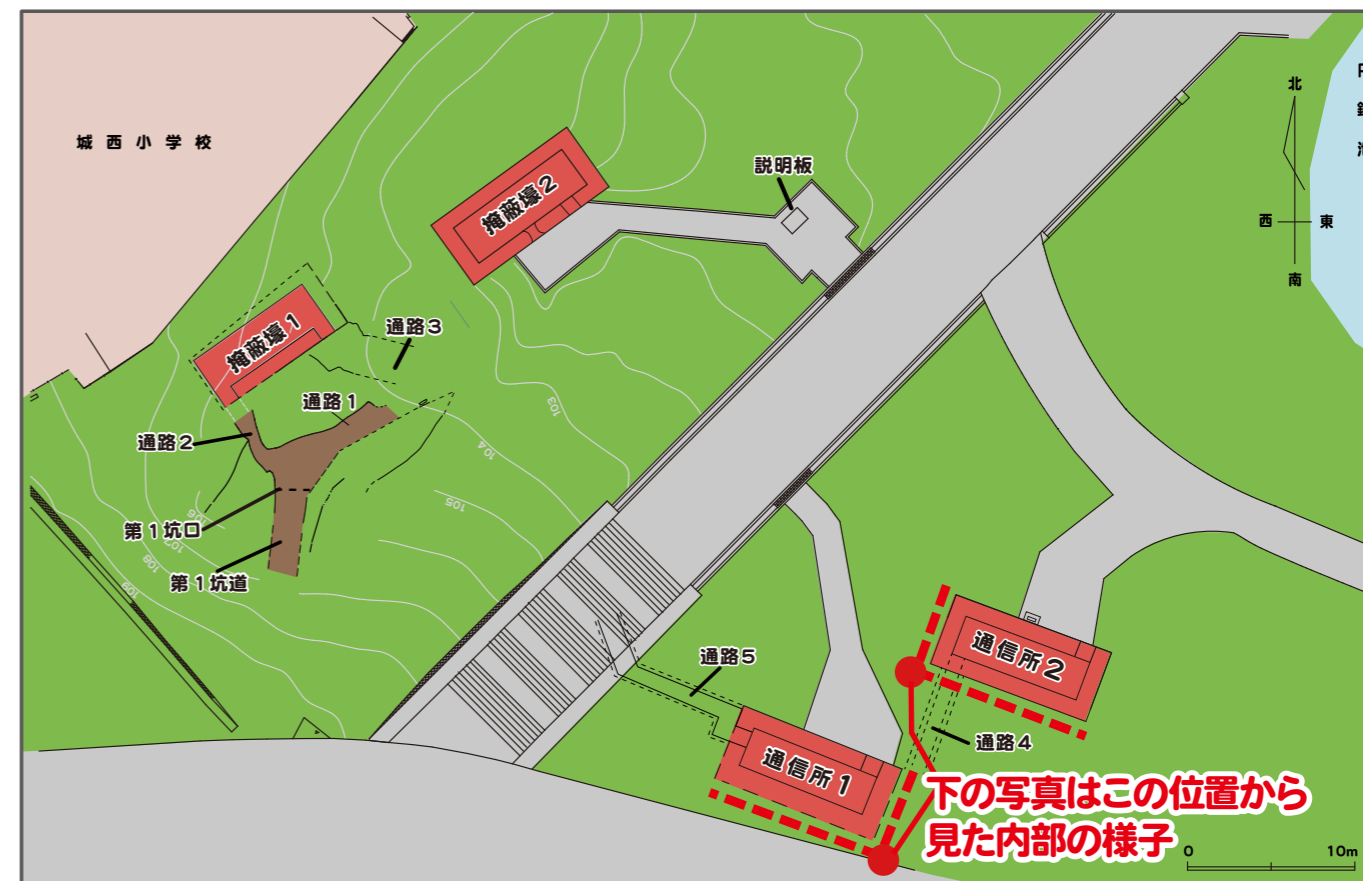
▲第1坑口、掩蔽壕、通信所跡周辺の平面図

4.3 ハンタン山の通信所跡

第1坑口から少し離れた場所に通信所跡があります。銃弾の跡や、アンテナ線を出すための穴があいています。



第32軍司令部壕に関連する通信施設で、電信第36連隊という通信部隊が使っていました。厚さ1mのコンクリートで造られていて、外壁には当時の弾痕が残っているほか、一部分は砲爆撃で崩れ落ちています。トーチカと呼ばれることもありましたが、明確な銃眼が見えず、見通しが良くない場所に立地することから、通信所としての使用が主だったと考えられます。



▲第1坑口、掩蔽壕、通信所跡周辺の平面図

下の写真はこの位置から見た内部の様子

宮平盛彦さん(第6中隊)の証言

「伝令に走っていく場所は、通信指揮所と呼ばれているところだった。守礼の門の近くの園比屋武御嶽の後方に、鉄筋コンクリートで造られてあった。奥には無線機が何台もあって、兵隊たちが一日24時間忙しそうに立ち働いていた。伝令は入り口にある長椅子に腰掛け、呼び出しがかかるのをじっと待つのである。普段は電文は電話で通達するので、通信指揮所に走る必要はないのだが、爆撃や砲撃で電話線が切断され不通になった場合は、通信指揮所に走って電文を受領し、それを分隊壕に持ち帰るのである。」

(出典: 兼城一(2000年)『沖縄一中・鉄血勤皇隊の記録:証言・沖縄戦(上)』p196)

このポイントに関する証言

大城秀一の証言

「僕が配属になった第5中隊(電信第36連隊)では、入隊当初は『一中生が中隊にやって来た』というわけで、大いに歓迎された。白沢分隊は首里城の南側城壁の下に通信所をかまえていた。通信機はジグンジュウスメーの墓付近の岩間を利用した壕に設置され、伊江島守備隊との通信に当たっていた。分隊の人員は白沢軍曹のもとに兵長、上等兵が各1名、それに兵2~3名と学徒兵5名をくわえ10名ほどだった。」

(出典: 兼城一(2000年)『沖縄一中・鉄血勤皇隊の記録:証言・沖縄戦(上)』p192)



▲通信所1の内部(南東から)

▲通信所2の内部(南西から)

4.4 立坑A

壕内の換気をする通気孔の1つです。第32軍の南部撤退後に米軍はここから入り壕内の詳細な調査を行いました。現在、正確な位置を調査中です。



【場所、坑道の全長等】

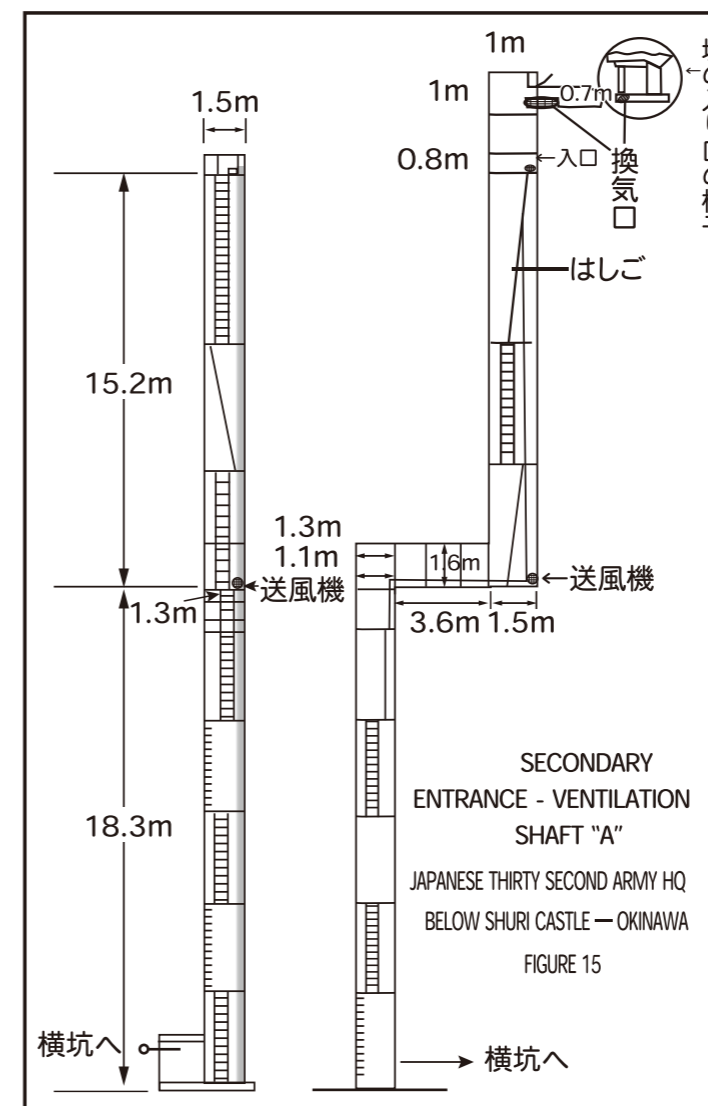
米軍の調査以降、位置は不明となっています。米軍調査資料『インテリジェンス・モノグラフ』によると、立坑Aは地上から約33mの長さとなっています。

【戦中に有した機能】

米軍調査資料『インテリジェンス・モノグラフ』でShaft A (立坑A) と記載されていた地点です。米軍調査によると約1m四方の地上の坑口から、石灰岩層を約33.5m垂直に掘られた立坑で、立坑内部の壁面には、木製の梯子が3~4m間隔で向きを変えながら打ち付けられていたということです。坑口から約15m降下した地点で水平に折れ、3.5mほど進むと再び約18m降下する構造となっていました。途中で水平に折れる構造は、地上で砲撃を受けても、坑口からの爆風が地下の坑道に流れ込まないように設計されていたからとみられています。また横に折れる地点には、送風機が備え付けてあったことが記されています。

【現況 (沖縄県調査に基づく)】

米軍の調査以降、状況等は不明です。



◀立坑A 側面図/インテリジェンス・モノグラフより作成



◀立坑Aを上から見た写真 (インテリジェンス・モノグラフより)

4.5 第2坑口、坑道

第2坑口は城西小学校敷地内にありますが正確な位置は不明です。第2坑道は作戦室等、主要な機能が配置されていました。第1坑道へ繋がる途中で崩落しており、その先の調査が進んでいません。



▲第2坑道内部の様子[2023年(令和5年)]



▲第2坑道内部(無支保工区間)の様子[2023年(令和5年)]

【場所、坑道の全長等】

第2坑口は日本軍によって爆破され未調査のままとなっています。第3坑道に並行して東側18mに第2坑道が位置しているのが確認されています。米軍調査資料『インテリジェンス・モノグラフ』によると、第2坑道は約119mの長さとなっています。泥岩主体で、幅約2.2m、高さ約2mの内部構造をしています。ただし、坑道幅と高さは一定ではないのであくまでも代表値を平均したものです。

【戦中に有した機能】

第2坑道には作戦室、電信部、気象部、搜索部等、機密情報に関する部隊が配置されていました。

【現況(沖縄県調査に基づく)】

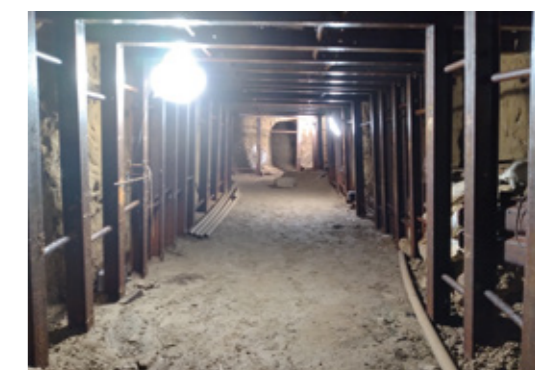
1993～1994年度(平成5～6年度)に試掘調査と鋼製支保工を仮設し立ち入りが可能となりました。坑道には掘削の跡や坑木が壕の構築当時のまま残っています。

4.6 第3坑口、坑道

第3坑口は城西小学校敷地内にありますが正確な位置は不明です。第3坑道は守礼門のほぼ真下を通り第2坑道に接続しています。



▲第3坑道の掘削の跡[2023年(令和5年)]



▲第3坑道内部の様子[2023年(令和5年)]

【場所、坑道の全長等】

沖縄県調査によると坑口は未調査ですが、坑道は城西小学校そばの調査用立坑から進入したのち、守礼門直下より南北に位置しています。米軍調査資料『インテリジェンス・モノグラフ』によると、第3坑道は約42mの長さとなっています。砂岩主体で、幅約2.7m、高さ約2mの内部構造をしています。ただし、坑道幅と高さは一定ではないのであくまでも代表値を平均したものです。

【戦中に有した機能】

第3坑道から第2坑道へ間に、軍司令官室、参謀長室、参謀室、高級副官室が並んでいました。

【現況(沖縄県調査に基づく)】

1993～1994年度(平成5～6年度)に試掘調査と鋼製支保工の仮設が行われ、立ち入りが可能になりました。天盤の抜け落ちはあるものの、ほとんど建設当時の形状で保存され、側壁には壕構築当時の掘削の跡も確認されています。

4.7 「エンジニアトンネル」

沖縄県の調査により第3坑道から枝分かれしているトンネルが確認されましたが、その機能は不明です。



▲第3坑道から枝分かれする「エンジニアトンネル」。
約10m進んだところで下り階段となり水没している。
[2023年(令和5年)]

【場所、坑道の全長等】

1994年度(平成6年度)の沖縄県調査で戦後初めて、「エンジニアトンネル」の存在が確認されました。第3坑道から枝分かれしています。米軍調査資料『インテリジェンス・モノグラフ』には、「エンジニアトンネル」の計測値はなく、全長などは不明です。

【戦中に有した機能】

機能の詳細は不明です。日本軍作成の壕内図には記録されておらず、日本側でどのように呼ばれていたのか、どういう目的で、いつ作られたのかも不明です。

【現況(沖縄県調査に基づく)】

トンネルは約10m進んだところで下り階段となり、水没しています。また側壁には当時のものと思われる坑木が残されています。

4.8 第4坑口、坑道

第4坑口、坑道は司令部の南側の出口の1つです。現在、詳細な位置は不明です。



【場所、坑道の全長等】

米軍、沖縄県ともに未調査となっています。米軍調査資料『インテリジェンス・モノグラフ』によると、第4坑道は約44mの長さとなっています。

【戦中に有した機能】

1945年(昭和20年)5月5日の日本軍の配備要図では、第4坑口は実戦部隊の第24師団、第44旅団の出入口とされ、第4坑道には「文書」や「機密」と記された施設が設置されていますが、米軍調査ではそれに関する記述はありませんでした。

【現況(沖縄県調査に基づく)】

戦後、第4坑口の周辺は民有地として整地され、坑口と坑道の位置は現在も不明のままとなっています。

4.9 立坑B

壕内の換気のために作られた通気孔の1つです。現在の沖縄県立芸術大学金城キャンパス敷地内に位置していると推定されますが詳細な位置は不明です。

【場所、坑道の全長等】

米軍、沖縄県ともに未調査となっています。米軍調査資料『インテリジェンス・モノグラフ』によると、立坑Bは地上から約15mの長さとなっています。

【戦中に有した機能】

日本軍の配置要図では、立坑Bは換気孔であったようです。

【現況(沖縄県調査に基づく)】

1968年(昭和43年)の沖縄観光開発事業団による調査で、立坑Bから地下壕へ進入を試みっていますが、その後、立坑Bの位置は不明となっています。

4.10 第5坑口、坑道

首里金城町にある坑口です。第32軍首脳部はこの第5坑口から南部へ撤退しました。



【場所、坑道の全長等】

首里金城町にあり、地上部から唯一壕内に入ることが出来る坑口です。米軍調査資料『インテリジェンス・モノグラフ』によると、第5坑道は約166mの長さとなっています。

【戦中に有した機能】

南端の第5坑口は軍司令部壕内で最も低い場所に位置し、水の使用も容易であったため、第5坑口付近に第32軍の将官や幕僚の入浴場と一般の浴場が設置されていました。日本軍の配備要図には、第5坑口付近に発電所と書かれた箇所が2つ記されています。米軍調査では、炊事場に付随する煙突の構造については詳しく記されており、炊事場から出た煙を第5坑口から離れた場所に分散して排気するように造られていたことがスケッチ図で示されています。米軍は、この炊事場の焼却炉内に埋められた日本軍の機密書類を発見しています。

【現況（沖縄県調査に基づく）】

1993～1994年度（平成5～6年度）の沖縄県の調査当時、石灰岩の崖下にある第5坑口は、斜面からの崩壊物でわずかに上部が開いているのみでした。試掘は坑木を組みながら行われました。坑道内では機関銃の銃身、銃弾、手榴弾、機器部品等が発見されています。またスコップやツルハシが発見され、トロツコのレールや枕木も確認されました。坑道内の状況については、沖縄県が映像を公開しています。



沖縄県公開映像



▲第5坑口の外観。壕の坑口手前に幅60センチでカーブ状の赤くさびたレールが、長さ約2.5メートルにわたって発見された。（2025年2月時点）



▲第5坑道内部の様子 [2023年(令和5年)]



▲第5坑道内部のコルゲート管 [2023年(令和5年)]

このポイントに関する証言

山内昌健さんの証言

「確か昭和20年の4月30日か5月1日あたりだと記憶している。第5坑道から小径づたいに小高い土手を上りつめると土手のてっぺんに仮便所があった。10日ほど前、突如異変が起こった。この仮便所が砲弾炸裂によって吹き飛ばされてしまった。その時2人の兵士が戦死した。冷却用水を第5坑道から私と相棒の2人で何度も行き来して運び、第二発電機の貯水用ドラム缶2つをいっぱい満たし、しばらく小休止をしていた。」

（出典：沖縄師範学校龍潭同窓会（1986年）『傷魂を刻むわが戦争体験記』p136-137）

このポイントに関する証言

安村昌享さんの証言

「5月27日、どしゃ降りの雨の中を、特編中隊第1第2小隊を前衛とし、第3小隊が後衛となり、その間に、参謀部、司令官、副官部、その後他の部隊が入って、移動隊は出発した。第5坑道から、松林を通り、真和志と与那原に通ずる比較的大きな道に出、永良橋を渡り識名の台上を通って、目指す摩文仁に出ようとするのであった。」

（出典：沖縄師範学校龍潭同窓会（1986年）『傷魂を刻むわが戦争体験記』p104）

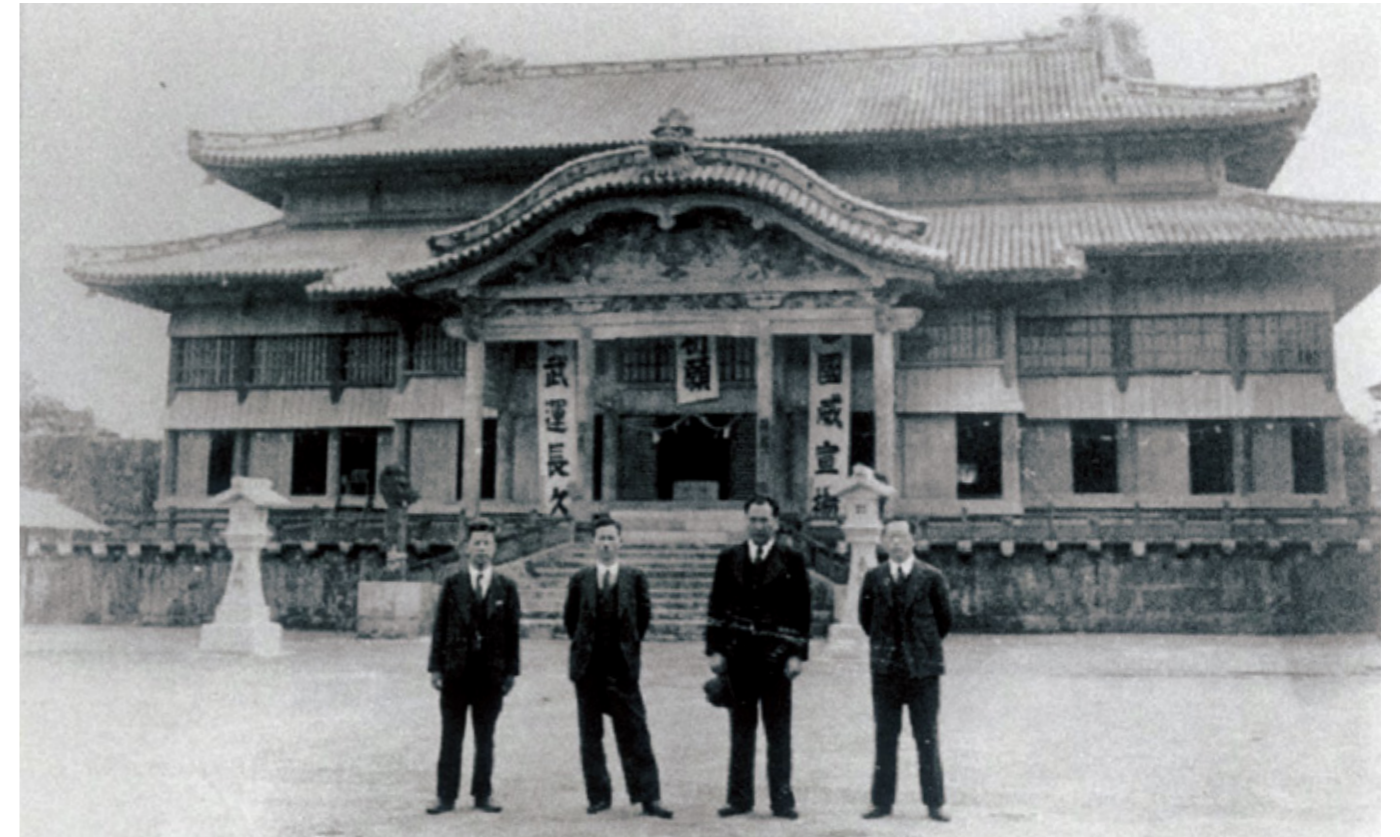
5 第32軍司令部壕周辺の 各ポイントの解説

5.1 首里城

琉球文化・歴史の象徴である首里城。第32軍司令部壕が首里城地下に構築されたことで米軍からの砲爆撃を受け、貴重な文化財とともに焼失しました。



▲沖縄神社本殿／出典：那覇市歴史博物館



▲首里城正殿は、1925年から沖縄神社拝殿として使用されていた（撮影年不明）／出典：那覇市歴史博物館

首里城は琉球王国の国王とその家族が居住した王宮であり、王国統治の行政機関である首里王府の中心でもありました。首里城の正殿は14世紀ごろに創建されたとされる琉球王国最大の木造建築でしたが、これまでに5回の火災に見舞われ、そのたびに再建を繰り返してきました。琉球王国の象徴として、政治や経済、文化の中心地としての役割を果たしてきました。1879年（明治12年）に琉球王国が沖縄県となった後は、敷地内に多くの学校が置かれ学問の地となりました。

1925年（大正14年）、老朽化していた正殿は「沖縄神社」の拝殿となりました。当時の古社寺保存法で城郭は対象外なので、保存のために社寺に変更したものです。

1944年（昭和19年）3月に第32軍が創設されると、同年7月ごろから実戦部隊が次々と配備され、首里城周辺に多くの陣地壕も建造されました。そのため、首里城周辺には沖縄戦の痕跡が現在も数多く残っています。

1945年（昭和20年）に沖縄戦で焼失した後、1950年（昭和25年）から琉球大学のキャンパスとして跡地利用されましたが、1984年（昭和59年）に琉球大学が西原キャンパスへ移転したのちには首里城の復元事業が推進され、1992年（平成4年）に首里城公園として開園しました。復元された首里城は18世紀以降の姿がモデルとなっています。

2019年（令和元年）10月31日に正殿など7棟が焼失する火災があり、現在は再建の工事が進められています。

2026年（令和8年）には正殿の復元が完了する予定です。



▲廃墟と化した首里城の瓦礫の山 [1945年（昭和20年）5月29日]／出典：沖縄県公文書館

このポイントに関する証言

そのひゃんうたきいしもん
5.2 園比屋武御嶽石門

世界遺産に登録されている園比屋武御嶽石門も沖縄戦で一部破壊され、戦後に復元されました。



国王が外出する時に安全祈願をした礼拝所です。間得大君が斎場御嶽での儀式に出掛ける際もここで祈願しました。第二尚氏第3代・尚真王時代の1519年に創建され、竹富島出身の西塘が造りました。琉球石灰岩で造られた石門は、屋根の飾りなどに日本と中国の様式を取り入れた琉球の代表的な石造建築です。

1933年(昭和8年)に国宝に指定されましたが、沖縄戦で一部が破壊され、1957年(昭和32年)に復元されました。屋根の右半分の白い部分は米軍の砲撃でかろうじて残った創建時のもので、左半分は復元したものです。1972年(昭和47年)に国指定重要文化財に、2000年(平成12年)には世界遺産に登録されました。



▲戦前の園比屋武御嶽石門／出典：那覇市歴史博物館



▲戦後の園比屋武御嶽石門／出典：那覇市歴史博物館

大田昌秀さんの証言

「4月下旬のある日、午後の3時頃だった。突然、壕(留魂壕)の入口の方から『軍司令部の捕虜が逃げたぞ!』『皆で捕えろ!』という怒号が起こった。壕内は一度にわき立った。為すこともなく壕内で悶々としていた皆は、それと色めき立ち、素早く鉄帽をかぶった。この捕虜は若い米軍の飛行士で、飛行中を撃墜されて落下傘で降下したところを捕まったとのことだった。永いこと軍司令部に留置されていたので私たちも顔を知っていた。逃亡した捕虜は、首里城の守礼の門の傍らの、園比屋武御嶽の裏手にくらわれていた者らしい。軍司令部の内部に捕えられていただけに、逃亡に成功すれば一大事だ。是が非でも捕えなければならない。が、夕方近くなり、吾こそは壕を飛び出た連中も一人残らず悄然と帰ってきた。見つけたが、足が早くてとても追いつけなかったとこぼしていた。幸いに軍の厳しい捜索で、二日後に首里郊外の末吉部落の方でつかまえたという報があって、皆はホッとした。」

(出典：大田昌秀、外間守善(1953年)『沖縄健児隊』p19-21より抜粋)

比嘉正範さんの証言

「園比屋武御嶽のところにトンボ機の搭乗員が捕虜になっていると聞き、見に行った。ところがそのパイロットは現在のヒッピーそっくりの服装をしていた。ズボンはすそを切り取り、サンダルみたいな靴をはいていた。上衣も飛行服ではなかった。その捕虜はあかぎの木にしばられていた。かなり弱っていて時々、目を開けては『ミジュ、ミジュ』とつぶやいていた。ふびんに思っ水飲ませたところ、横から現れた兵隊に張りたおされた。『捕虜に水をやってはいかん。敵に水をやるのは利敵行為だぞ』とどなったので、われわれは早々に退散した。」

(出典：兼城一(2000年)『沖縄一中・鉄血勤皇隊の記録：証言・沖縄戦(上)』p142-143)

兼城一さんの証言

「園比屋武御嶽の立木にしばられていた捕虜は何人かいたようである。沖縄戦がはじまると、捕虜は後ろ手にしばられたまま砲弾のなかでさらし者にされた。」

(出典：兼城一(2000年)『沖縄一中・鉄血勤皇隊の記録：証言・沖縄戦(上)』p144)



▲現在の園比屋武御嶽石門。右側は創建時の屋根。左半分は米軍の砲撃で破壊された屋根を復元。

高嶺朝勇さんの証言

「砲撃が鳴りをひそめたある夜、守礼の門の近くの園比屋武御嶽のところきた時だ。大きなリヤカーの中からうめき声があるので近寄ってみると、縄でぐるぐる巻きにされた米兵捕虜だった。エビのように体をまげて転がっていた。繁多川上空で撃墜されたグラマン機のパイロットだった。しきりに『ミジュミジュ』とつぶやくようにいう。誰かが『水が欲しいといっているのではないか』といい、空き缶に水をくんできて飲ませてやった。うまそうに飲み終わると『サンキュウベリマッチ!』と礼をいった。」

(出典：兼城一(2000年)『沖縄一中・鉄血勤皇隊の記録：証言・沖縄戦(上)』p195-196)

ちゅうこんひ
5.3 忠魂碑

首里城の歓会門手前の石垣の上に残されているのが忠魂碑です。沖縄戦での爆撃により碑も台座も削れてしまっています。

忠魂碑は「国のために忠義を尽くして戦死した」兵士を祀った記念碑です。沖縄でも全国と同様に日露戦争(1904~1905年)後から本格的に建立されました。1904年(明治37年)に内務省が1市町村1基の原則を打ち出し、文部省が学校の敷地を建立場所として認めたことから、学校での建立が定着するようになりました⁷。忠魂碑の前では戦死した兵士を慰霊するとともに、国威発揚、忠君愛国、武運長久を意識づける儀式が行われました。

戦後はGHQ(連合軍総司令部)の「神道指令」を受けて、1946年(昭和21年)11月に内務省が全国の忠魂碑などの破壊を命じましたが、本土と分離した沖縄には適用されませんでした。そのため、沖縄島や周辺離島、宮古島、石垣島に27の忠魂碑が残存しています⁸。

歓会門近くの斜面にある忠魂碑は旧首里市の忠魂碑ですが、建立年など詳細は不明です。砲撃を受けて碑も土台も原型をとどめないほどの残骸をさらして、第32軍司令部壕が置かれた首里での激しい戦闘を伝えています。



▲忠魂碑の位置



▲現在の忠魂碑の状態



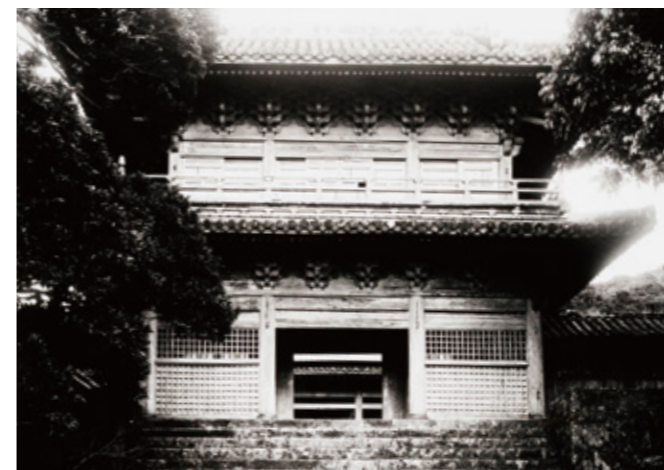
▲戦前の首里の忠魂碑
/出典:『写真集首里城』(那覇出版)

5.4 円覚寺跡

国指定史跡の寺院跡です。戦前は国宝にも指定されていました。同地には、その他にも重要文化財の旧円覚寺放生橋をはじめ4件の指定文化財が存在します。



▲焼失した仏殿に安置されていた仏像 / 出典:沖縄県立博物館・美術館



▲戦前の円覚寺三門 / 出典:沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館



▲円覚寺の放生橋と三門に続く階段。右上の建物は琉球大学農学ビル [1961年2月4日] / 出典:那覇市歴史博物館

このポイントに関する証言

大田昌秀さんの証言

「あまりの砲撃の激しさに、私達はなすすべもなく、母校を始め、孔子廟、弁財天や国宝の円覚寺などが目の前で燃え上がるのを、壕(留魂壕)の口からただ黙って見ていなければならなかった。全く身を焼かれる思いだった。何百年もの歴史をもつ、沖縄の文化財が、あたかも藁小屋が燃えるように灰となっていくのを見て、私達は無念の涙をのんだ。

(出典:大田昌秀,外間守善(1953年)『沖縄健児隊』p8)

5.5 沖縄師範学校(男子部)の門柱跡

戦前の教員養成機関です。沖縄戦で学生は鉄血勤皇隊として動員されて多くが亡くなりました。現在は県立芸大のキャンパスになっており、門柱のみが建て直され残っています。



沖縄師範学校は戦前、教員を養成した官立(国立)の教育機関です。沖縄で初めて設立された中等教育機関で、大学のない当時は唯一の最高学府でした。前身は1880年(明治13年)に設立された「会話伝習所」で、本土との同化を目指し、共通語教育を重視した教員養成機関でした。その後、沖縄県立師範学校→沖縄県尋常師範学校→沖縄県師範学校と改称を経て、1943年(昭和18年)に官立沖縄師範学校となりました。予科2年、本科3年制で、予科は高等小学校卒業生、本科は予科修了生や中等学校卒業生が入学できました。一地域から数人しか入ることのできない「狭き門」の難関校でした。

沖縄戦では、予科2年生から本科3年生まで(15~18歳)の386人が1945年(昭和20年)3月31日から師範鉄血勤皇隊として戦場に動員され、「師範隊本部」「千早隊」「斬込隊」「野戦築城隊」に分けられました。6割近い226人が戦没しています¹⁰。首里当蔵町の龍潭ほとりにあった敷地には、現在、沖縄県立芸術大学が建っています。敷地内(旧円覚寺跡の向かい)には当時の正門の門柱が建て直されて残っていて、弾痕も確認できます。

沖縄師範学校女子部は現在的那覇市安里の栄町市場一帯に校舎があり、沖縄県立第一高等女学校と同じ敷地に併置されていました。両校の学徒は222人が戦場に動員され、のちに「ひめゆり学徒隊」と呼ばれました。



▲戦前の沖縄師範学校正門/出典：那覇市歴史博物館



▲沖縄師範学校(男子部)の門柱跡

このポイントに関する証言

安里繁さんの証言

「4月25日、今日は艦砲や爆撃が少ないようだと思いながら、いつもと同じように軍司令部まで伝令に行った。(中略)軍司令部の壕に飛び込んでからは、さすがに出る気になれず、壕内をあっちこっちらついていた。爆弾の遠くで落ちる音を聞いても身の毛がよだった。壕の出口で、出ようか出まいかと尻込みしているとその衛兵に、『こらっ!何をぐずぐずして入口をふさいで立っているんだ』と毒気を帯びたドラ声をあびせられた。それで私は反発的に壕を飛び出し、城壁目指して走った。ようやく城壁まで駆けつけて、その下に伏せて動悸の静まるのを待った。数分経ってさあ走ろうとしたとき、爆音と共に妙な音が聞こえてきた。本能的に音の方を見た。あっ!ロケット弾だ。そして目標はわが師範学校だ。一、二、三・・・と数えた。次々と炸裂する。その音と共に60余年の歴史を誇る師範学校の赤い藁が、見る間に飛散していった。言い尽くせぬ寂しさで胸が一杯になり茫然と眺めていた。日が暮れる頃は、真赤な焰が天を焦がしていた。その焰は沖縄師範と元琉球王宅(尚家)の全てを焼き尽くしている焰だった。」

(出典：大田昌秀、外間守善(1953年)『沖縄健児隊』p205-206)

5.6 留魂壕・新聞社壕

沖縄師範学校男子部が拠点とした壕。壕内の東側部分では「沖縄新報」（当時の新聞）の発行も行われていました。



首里城の物見台である東（あがり）のアザナの城壁に掘削された壕です。幕末の思想家・吉田松陰の「留魂録」にちなんで「留魂壕」と名づけられました。沖縄師範学校男子部と新聞社が利用していました。1945年（昭和20年）初頭から師範男子部の生徒や職員が掘り始め、3月中ごろに完成しました。壕は総延長130メートル、「ヨ」の字型で3か所の出入り口がありました。3月23日の上陸前空襲時から師範生らが避難するようになり、3月31日には壕の前に386人の生徒が集められ、師範鉄血勤皇隊が結成されました。

3月下旬から東側の壕は当時の新聞「沖縄新報」の印刷発行に使われ、第32軍司令部の南部撤退が決まった直後の5月25日まで続けられました。

「沖縄新報」は1940年（昭和15年）12月に沖縄日報、沖縄朝日新聞、琉球新報の3紙が統合されてできた新聞です。国の言論統制強化の方針のもと、一県一紙制度が進められていました。軍部の意向に沿い、戦意高揚をあおる記事を載せ、県民を戦場に駆り立てました。留魂壕跡からは県の発掘調査で、新聞の活字が見つかりました¹¹。



▲1945年（昭和20年）4月29日発行「沖縄新報」



▲留魂壕全体



留魂壕跡 壕口前面の石積

同 壕内の工具痕

▲留魂壕の内部イメージ

いり
5.7 西のアザナ

沖縄戦に関連する場所を見渡すことができる物見台です。北は読谷・北谷沖海岸、西は慶良間諸島、南は与座岳、八重瀬岳まで見渡せます。沖縄戦の戦線の推移を時系列に沿って紹介できます。



アザナとは物見台のことです。城郭の西端に築かれた物見台で、別名を「島添(しましー)アザナ」といいます。かつてはここに旗を立て、鐘をたいて時刻を知らせていました。標高は約130mで、那覇市街や那覇港の様子、そして遠く水平線上には慶良間諸島を望むことができます。琉球王国時代は進貢船の到来やのろし信号を見分ける場所でもありました。

ここでは沖縄戦の全体像が説明できます。西側には1944年(昭和19年)の十・十空襲で焼けた那覇の町、疎開する学童らに乗せた対馬丸が出港した那覇港、1945年(昭和20年)3月26~27日に米軍が上陸した慶良間諸島、沖縄島を取り囲み約1,500隻の米軍艦船が浮かんでいた海、5月に日米が激しく戦ったシュガーローフが見えます。北側には、4月1日に米軍が上陸した読谷・北谷海岸、激戦地となった前田高地が、南に目を転じると日本軍が最後の抵抗をした八重瀬岳や与座岳が見渡せます。



◀1945年(昭和20年)
6月のシュガーローフ・ヒルの風景
(現在の那覇市新都心地区)
/出典:沖縄県公文書館



▲慶留間島(慶良間諸島)に上陸する米軍強襲部隊 [1945年(昭和20年)3月] /出典:沖縄県公文書館



▲現在の西のアザナの下側にあった琉球大学クラブ室より望む首里金城町方面の景色 [1961年(昭和36年)2月4日] /出典:那覇市歴史博物館

5.8 第5砲兵司令部壕跡(通気孔)

1995年(平成7年)に沖縄県が深度12m付近まで通気孔の試掘調査を実施しました。その後の調査は未実施となっています。



▲通気孔 [2024年(令和6年)12月時点]。
右側部分が切れているのは、道路工事の際に切断されたため。



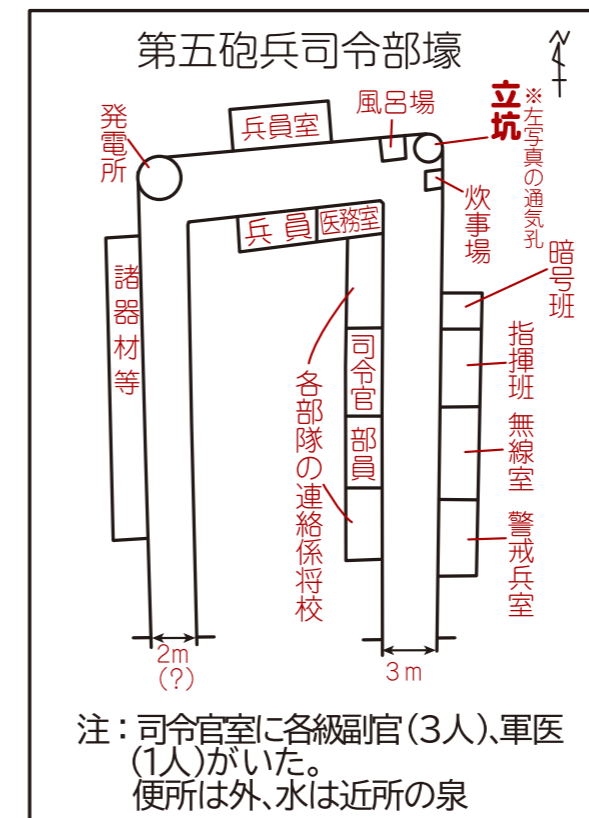
▲1960年の通気孔の様子、奥に見えるのは沖縄テレビの鉄塔
/出典:吉嶺全一さん撮影

首里杜館の南側斜面の地下には第5砲兵司令部があり、通気孔が残っています。ただしこれまで調査はほとんど行われておらず今後の課題となっています。第5砲兵司令部壕の大きさは東西に約50m、南北に約100mとされていますが、証言者によって東西と南北の数字が逆転していることもあり、正確には不明です。当初は東側の第32軍司令部壕と連結する予定で築城していましたが、米軍上陸に伴い計画が中止されたといわれています。

第5砲兵司令部は第32軍司令部の直轄部隊であり、首里城周辺には第32軍司令部壕、第5砲兵司令部壕の他にも多くの陣地が構築されていました。第5砲兵司令部には1945年(昭和20年)3月下旬、沖縄県立第一中学校の鉄血勤皇隊144人と、沖縄県立工業学校の通信隊76人が学徒兵として動員されました(その後、いずれも他の部隊にも分散配置)。工業通信隊は無線班に42人、有線班に14人、暗号班に20人が配属されました。米軍上陸後は浦添や豊見城などの監視所に配置され、電話線の架設・修理、伝令などのほか、壕掘りや運搬作業などの雑役もさせられました¹²。

1945年(昭和20年)5月下旬、第32軍司令部の撤退に伴って第5砲兵司令部も首里を去りました。第5砲兵司令部壕は撤退時に爆破されました。

工業通信隊で生き残ったのはわずか9人でした。現在、沖縄県立芸術大学当蔵キャンパス内には、沖縄県立工業学校の後継である沖縄県立沖縄工業高校同窓会によって建立された「沖縄県立工業学校跡碑」があります。また、糸満市摩文仁の平和祈念公園内には「沖縄工業健児之塔」が建立されています。



▲第5砲兵司令部壕平面図イメージ
/出典:潮書房「丸別冊13号最後の戦闘(沖縄・硫黄島戦記)」(1989年)内、清水徹也「第五砲兵司令部の一員として」(226p)を参考に作成



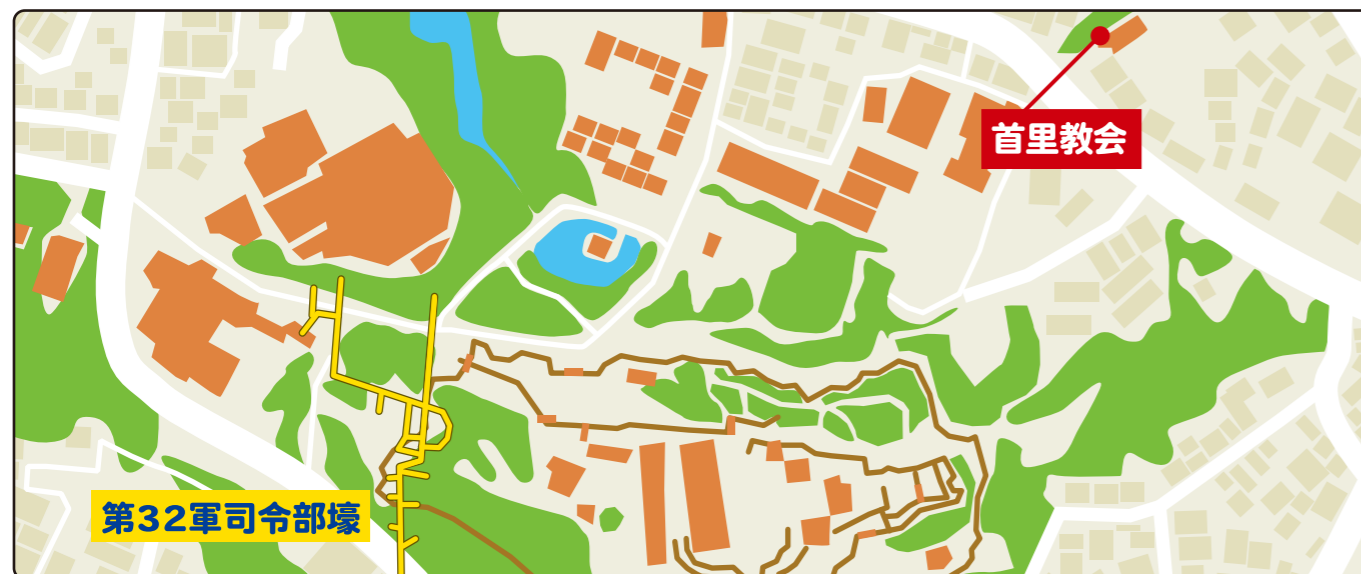
▲沖縄県立工業学校跡碑



▲沖縄工業健児之塔(糸満市摩文仁)

5.9 首里教会

戦前からあったキリスト教の教会です。沖縄戦では戦場となり、キリスト教徒の多い米兵からも銃を向けられた歴史を持つ教会です。



1908年(明治41年)5月に日本メソジスト首里教会として当蔵町の識名殿内に設立され、その後伊江殿内を経て、1936年(昭和11年)に現在地に移りました。同年、当時としては珍しい鉄筋コンクリート造の教会堂が建設されました。

1944年(昭和19年)には教会員の県外疎開や日本軍への奉仕作業等で教会の集会が困難となりました。さらに憲兵隊から軍使用の理由で教会堂の明け渡しを要求されました。

1945年(昭和20年)には首里の激戦で教会堂も激しい攻撃を受け、破壊されました。屋根の十字架にも銃弾や砲弾の痕跡が数多く残りました。戦後、焼け野原で景色が一変した首里で、損傷しながらも残っている教会堂の十字架は、疎開先や出征先から戻ってきた人々にとって首里を確認できるシンボルになっていました。

1957(昭和32年)年には、首里教会にて沖縄キリスト教団が「沖縄キリスト教学院」を創設します。当時の首里教会の仲里朝章牧師を院長として開校式が行われました。

1984年(昭和59年)、教会堂が解体され、教会堂の塔屋にあった弾痕の残る十字架も撤去されました。しかし歴史の証言者として伝えるため、塔屋と十字架は2017年(平成29年)に復元され、当時の様子を今に伝えています。撤去された現物の十字架は教会内で保存され見学ができます¹³。



▲教会内で保存されている現物の十字架。戦後はコンクリートでコーティングされて使用されていた。



▲現在の首里教会の教会堂塔屋。損傷しながらも残っていた十字架を再現したレプリカが掲げられている。



▲戦時中の首里教会、米兵が教会に銃を向けている／出典：沖縄県公文書館

5.10 中城御殿

琉球王国最後の国王尚泰が首里城を強制退去させられた際に一時居住していた屋敷跡です。石垣に沖縄戦当時の弾痕が残っています。



琉球王国時代は世子（王子）が居住する屋敷でした。元の中城御殿は現県立首里高校の敷地に17世紀前半に創建されました。世子は中城間切の領地を与えられたため、中城御殿と呼ばれました。1875年（明治8年）に龍潭のほとりへ移りましたが、わずか4年後の1879年（明治12年）に明治政府による琉球併合で琉球王国が廃止され、最後の国王尚泰が首里城を強制退去させられ、中城御殿で一時居住していました。戦前まで尚家の屋敷でしたが、沖縄戦中は日本軍の宿舎として使用され、米軍の砲爆撃で焼失しました。県道沿いの石垣には弾痕が残っています。

戦後、この敷地は琉球政府立博物館、県立博物館として利用されていましたが、2007年（平成19年）に博物館が新都心地区へ移転した後は発掘調査や復元整備が進められています。王家に伝わった品々である国宝の琉球国王尚家関係資料などを展示する施設となる予定で、2026年（令和8年）以降の公開を目指しています。



▲戦前の中城御殿／出典：那覇市歴史博物館



▲戦後の中城御殿／出典：那覇市歴史博物館

5.11 特設警備第223中隊永岡隊慰霊之碑

安国寺の敷地内にある慰霊碑です。当時の安国寺の住職が隊長でした。



▲特設警備第223中隊、通称「永岡隊」の慰霊碑



特設警備第223中隊（通称「永岡隊」）は安国寺の住職であり県立一中の教師でもあった永岡敬淳（ながおか・けいじゅん）隊長のもと地元住民で構成されたいわゆる「郷土部隊」でした。永岡隊は、第32軍司令部の首里撤退後も「郷土部隊として最後まで首里を守れ」と命令され戦闘を続けました。現在慰霊碑があるのは安国寺の敷地内で、ここに当時、永岡隊が使用していた壕がありました。

このポイントに関する証言

翁長安子さんの証言

（当時は県立第一高等女学校に通う15歳。永岡隊の看護要員として動員されました。）

「5月29日の明け方、水くみに出ると、哨兵が『トンボ（偵察機）が来るぞー』と叫ぶやいなや、いつもより早く偵察機が飛んできました。日本軍が撤退しているか確認するためだったんでしょうね。大急ぎで壕に駆け込んだけど、すぐさま戦車砲がポーンと響きました。どんどん戦車が近づいてくる音が出て、火炎放射機が壕の入り口を焼き始めました。炎と煙はようやく収まったけど、息苦しくてたまらない。壕の上でギリギリ、ギリギリと音がしました。永岡隊長が『馬乗りされたな』とおっしゃいました。馬乗りとは米軍が壕の上に乗って、穴を掘って爆薬を入れること。トンネルを掘るときにする作業を、私たちがいる壕でもしたのよ。ガラガラッと岩が崩れ始めた音は聞いたけど、その後はよく覚えてません。私たち女性の側には大きな金庫があったから岩が崩れても助かったけど、脱出しないといけな。永岡隊長のベルトを握って踏み出して出口に来たら、辺り一面は首や手足のちぎれた死体でごろごろ。注意深く一歩二歩と歩いたけど死体を踏んで転んで、崖から転げ落ちてしまいました。」

（出典：琉球新報、2018年3月14日、28面）

5.12 一中戦没学徒資料室

鉄血勤皇隊及び通信隊として動員された沖縄県立第一中学校の同窓会施設である養秀会館に設置された常設の資料展示室です。この場所にはもともと、同校の学生寮「養秀寮」がありました。



現在の首里高校の前身である沖縄県立第一中学校の生徒たちは、沖縄戦当時、鉄血勤皇隊や通信隊として動員され敵の動向を見張る監視や壕掘り、弾薬・食糧運搬などの任務に当たりました。生徒273人が動員され、153人が戦没しました。¹⁴ 沖縄県立第一中学校の前身は、1880年（明治13年）に設立された「首里中学校」で、その後変遷を経て、1911年（明治44年）に沖縄県立第一中学校と改称しました。1945年（昭和20年）3月28日に鉄血勤皇隊は第5砲兵司令部に、通信隊は電信第36連隊の「第4中隊」「第5中隊」「第6中隊」「固定中隊」の4つの無線中隊に分散配属されます。

5月14日、鉄血勤皇隊は、鉄血勤皇隊本部、第5砲兵司令部、独立測地第1中隊、野戦重砲兵第1連隊、独立重砲兵第100大隊、独立工兵第66大隊の6つに再編され、翌15日に分散配置されました。5月27日～6月3日、鉄血勤皇隊が配属された各部隊はそれぞれ、現在の糸満市の波平、新垣、真壁、伊原、宇江城、喜屋武に撤退しました。5月27日、通信隊が配属された各部隊は南部に撤退し、29日に摩文仁に到着しました。6月下旬、壕が米軍に包囲され、兵隊とともに斬り込みに参加するなどして多数が死亡しました。

一中健児之塔の裏には、一中鉄血勤皇隊が使用した壕跡があります。学徒隊を兵員として訓練・指導するため、1945年（昭和20年）3月29日に派兵された第5砲兵司令部（球9700部隊）の9名の教導兵がこの場所で寝起きしていました。また、沖縄戦を前にして、それまで沖縄県立第一中学校内の銃器庫に収納されていた銃器などを古い墓の岩穴を利用して保管しており、その銃器庫跡も見ることができます。



▲県立第一中学校鉄血勤皇隊・教導兵詰所跡



▲一中健児之塔



▲資料展示室内の様子

5.13 首里金城町石畳道

米軍によって激しい砲爆撃を受けた首里の町に戦前から残る石畳道です。もともとは首里城から那覇湊(現在の那覇港)に向かって兵を派遣するための軍用路として建設されました。



首里金城町石畳道は、首里城から国場川の真玉橋に至る長さ4km総延長10kmの官道だった真珠道(まだまみち)の一部で、琉球王国尚真王の治世である1522年にその建造が始まりました。

1522年に造られた当時は琉球石灰岩の敷石が隙間なく敷き詰められ表面が白く輝いていたことから、真珠道(まだまみち)という名前が付けられました。主に略奪を行う海賊の脅威に対する防衛を目的に、首里城から那覇湊(現在の那覇港)に向かって兵士を派遣するために使われる主要街道でした。真珠道の大部分はその後数世紀に渡って使われ続け、保存状態が良好な部分では発掘や研究が行われています。

1945年(昭和20年)に沖縄戦が始まると、首里は第32軍司令部壕が置かれ日本軍の重要拠点となったため、米軍によって激しい砲爆撃を受けました。町は破壊しつくされ、貴重な文化財も数多く失われました。真珠道の大半も同様に破壊されましたが、金城町に現存する238mの区間は戦火を逃れ、首里金城町石畳道としてその姿を現在に伝えています。これは米軍が上陸した地点である沖縄島西海岸(現在の読谷村・嘉手納町・北谷町の海岸)から南下しながら攻撃をしてきたこと、さらに首里金城町石畳道が集中的に砲爆撃を受けていた第32軍司令部壕よりも南側の斜面に存在したことで海側からの艦砲射撃がちょうど上空をすり抜ける位置にあったことなどが大きな理由だと考えられます。



▲首里金城町石畳道(2026年1月撮影)



▲戦前の首里金城町石畳道[1940年1月] / 出典:坂本万七撮影「首里金城の石畳道 繁多川、識名を望む」(日本民藝館所蔵)

6 ガイドのモデルルート

スポット

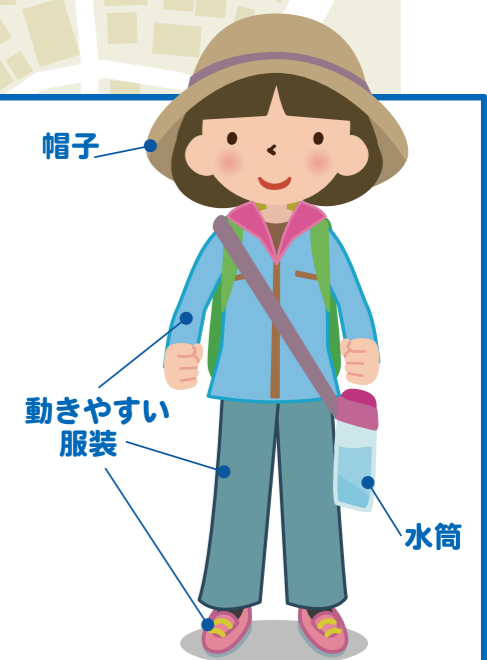
【3～4時間コース】

首里杜館→守礼門→園比屋武御嶽石門→忠魂碑→第1坑口→
 掩蔽壕→通信所跡→留魂壕・新聞社壕→首里城→西のアザナ
 →第5砲兵司令部壕跡（通気孔）→第5坑口→一中戦没学徒
 資料室→首里杜館



フィールドワークの 服装と持ち物

現場では常に動き回るため、服装や
 持ち物にも工夫が必要です。右にガ
 イドの持ち物の例をあげてみましょ
 う。実際のガイドはこうした基本的な
 持ち物から、自分なりの工夫をこらし
 たアイテムまで幅広く使用します。



7 沖縄県の取り組み

壕を活用した平和発信・継承

壕を活用した平和発信・継承への取り組みにあたっては、有識者の意見を踏まえながら、次のとおり実施していきます。

1 文献資料等を活用した平和発信・継承

第32軍司令部壕は戦争を司令する役割を担い、沖縄戦の方向性を決定づける判断がなされた重要な場所です。第32軍司令部壕の保存・公開にあたっては、壕内の活動・生活等に関する文献資料や証言記録の収集等の調査研究の成果を活用し、同壕の持つ特別な機能等について、史実等に基づき正確に発信・継承していきます。

2 平和教育等への利活用

(1) 平和教育・学習

第32軍司令部壕を、壕内部の追体験やその他の手法を用いて、沖縄戦の実相を伝えることができる平和教育・学習の場として利活用します。また、調査研究で判明した各場所の役割を分かりやすく伝えられるよう、第32軍司令部壕の各坑口・坑道を巡るフィールドワークを実施します。これにより、第32軍司令部壕に加え、掩蔽（えんべい）壕や留魂（りゅうこん）壕等の首里地域の戦争遺跡や県内戦争遺跡への興味関心を高めるとともに、戦争で焼失した中城御殿跡や円覚寺跡等の文化財を含めた、地域の歴史文化を知るきっかけにもなるなど、総合的な平和教育・学習につながることを期待されます。さらに、首里城公園に来場する多くの観光客にも関心を向けってもらう方策を検討するとともに、第32軍司令部壕が最後に陣を構えた摩文仁にある沖縄県平和祈念資料館と連携した平和教育・学習を展開できるよう取り組みます。

(2) 平和交流活動

県内外の戦跡や平和に関連する施設との平和のネットワークを構築し、イベントの共同開催や人材の相互交流等の平和交流活動を実施することにより、多くの人たちが第32軍司令部壕を訪れる機会を創出します。また、見学者に第32軍司令部壕を解説するための語り部やガイド等の育成に向け、収集した資料や証言を活用したガイドテキストの作成に継続して取り組んでいきます。

(3) 見学方法

第32軍司令部壕における壕内部の見学は、ガイドが同行し壕内の機能を伝えられるよう検討します。また、展示施設や各坑口・坑道のエリアについては、ガイドの同行、見学可能な時間帯などの必要な事項について、引き続き検討を行います。

3 広報・PR活動

第32軍司令部壕の保存・公開の取組推進に向けた県民の機運を高めるべく、施設の整備状況や詳細調査等の様々な情報を掲載するなど専用ホームページの充実を図るとともに、首里城復興と連動した情報発信に取り組みます。

4 沖縄県史跡に指定

第32軍司令部壕は2024年（令和6年）11月29日付で沖縄県史跡に指定されました。沖縄戦時の軍事施設跡が沖縄県の史跡に指定されるのは初めてのことで、文化財保護の観点から大変意義深いものとなりました。第32軍司令部壕は、「住民を巻き込んだ組織的持久戦の展開」という沖縄戦の方向性を決定づける判断がなされた場所として、沖縄戦の実相を次世代に伝える極めて重要な遺跡と評価されています。また、2025年（令和7年）は戦後80年の節目に当たり、戦争体験や教訓の風化が懸念される中で、戦争の不条理さ、残酷さ、醜悪さを知るとともに、平和の尊さを伝える貴重な遺跡でもあります。沖縄県は、引き続き関係機関や那覇市教育委員会などと連携しながら、文化財の適切な保存と活用に努めてまいります。



▲第32軍司令部壕の文化財指定範囲

8 参考文献リスト

8.参考文献リスト

- ・ 沖縄県教育庁文化財課史料編集班『沖縄県史 各論編第6巻 沖縄戦』（沖縄県教育委員会、2017年）
- ・ 沖縄県教育庁文化財課史料編集班『沖縄県史 資料編23 沖縄戦日本軍史料 沖縄戦6』（沖縄県教育委員会、2012年）
- ・ 琉球政府『沖縄県史 第9巻 沖縄戦記録1』（図書刊行会、1971年）
- ・ 沖縄県知事公室平和・地域外交推進課『首里城地下 第32軍司令部壕パンフレット』（沖縄県、2024年）
- ・ 防衛庁防衛研究所戦史室『戦史叢書11 沖縄方面陸軍作戦』（朝雲新聞社、1968年）
- ・ 八原博通『沖縄決戦 高級参謀の手記』（中央公論新社、2015年）
- ・ 沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書75 沖縄県の戦争遺跡』（沖縄県立埋蔵文化財センター、2015年）
- ・ 那覇市企画部市史編集室『那覇市史 資料篇 第2巻中の6(戦時記録) 市民の戦時体験記(公募原稿)、戦時資料(那覇市企画部市史編集室、1974年)』
- ・ 那覇市企画部市史編集室『沖縄の慟哭 市民の戦時・戦後体験記1(戦時篇)』（那覇市企画部市史編集室、1981年）
- ・ 沖縄県警察史編さん委員会『沖縄県警察史 第2巻(昭和前編)』（警察本部、1993年）
- ・ 南風原町史編集委員会『南風原町史第3巻 戦争ダイジェスト版 南風原が語る沖縄戦』（南風原町、1999年）
- ・ 沖縄タイムス社『沖縄戦記 鉄の暴風』（筑摩書房、2024年）
- ・ 大田昌秀、外間守善『沖縄健児隊』（日本出版協同、1953年）
- ・ 龍潭同窓会『龍潭百年—沖縄師範学校百年記念誌』（龍潭同窓会、1980年）
- ・ 沖縄師範学校龍潭同窓会『傷魂を刻む わが戦争体験記』（龍潭同窓会、1986年）
- ・ 工の絆編集委員会『工の絆 弾雨下の工業健児』（沖縄県立沖縄工業高等学校同窓会、1995年）
- ・ 渡久山朝章『南の巖の果まで—沖縄学徒兵の記』（文教図書、1978年）
- ・ 大田昌秀『沖縄鉄血勤皇隊』（高文研、2017年）
- ・ 外間守善『私の沖縄戦記 前田高地 六十年目の証言』（角川学芸出版、2012年）
- ・ 兼城一『証言・沖縄戦 沖縄一中・鉄血勤皇隊の記録(上)』（高文研、2000年）
- ・ ひめゆり平和祈念資料館『ひめゆり平和祈念資料館資料集4 沖縄戦の全学徒隊』（フォレスト、2020年）
- ・ 金城和彦『沖縄戦の学徒隊 愛と鮮血の記録』（日本図書センター、1992年）
- ・ 吉浜忍ほか『沖縄戦を知る事典 非体験世代が語り継ぐ』（吉川弘文館、2019年）
- ・ 古賀徳子ほか『続・沖縄戦を知る事典 戦場になった町や村』（吉川弘文館、2024年）
- ・ 琉球新報社『証言沖縄戦 戦禍を掘る』（琉球新報社、1995年）
- ・ 大田昌秀『これが沖縄戦だ 写真記録』（琉球新報社、1977年）
- ・ 牛島貞満『首里城地下 第32軍司令部壕』（高文研、2021年）
- ・ 保坂廣志『首里城と沖縄戦 最後の日本軍地下司令部』（集英社、2024年）
- ・ 田村洋三『沖縄の島守 内務官僚かく戦えり』（中央公論新社、2006年）
- ・ 田村洋三『沖縄一中鉄血勤皇隊 学徒の盾となった隊長篠原保司』（光人社、2010年）
- ・ 吉村昭『殉国 陸軍二等兵比嘉真一』（文芸春秋、1991年）
- ・ 奥田鑛一郎『沖縄軍司令官 牛島満』（芙蓉書房、1985年）
- ・ 小松茂朗『牛島満軍司令官沖縄に死す 最後の決戦場に散った慈愛の将軍の生涯』（潮書房光人社、2016年）
- ・ H.T.CRESWELL, J.HIRAOKA, R.NAMBA『英和和英日米軍事用語辞典太平洋戦争篇』（榕樹書林、2001年）

脚注

- 【4 P】1 防衛庁防衛研究所戦史室『戦史叢書11 沖縄方面陸軍作戦』（朝雲新聞社、1968年）p116
- 【8 P】2 八原博通『沖縄決戦 高級参謀の手記』（中央公論新社、2015年）p323-324
- 【10P】3 沖縄県教育庁文化財課史料編集班『沖縄県史 各論編第6巻 沖縄戦』（沖縄県教育委員会、2017年）p186-187
- 【11P】4 昭和27年4月24日付『沖縄の遺骨調査報告(2)』茨城県立歴史館所蔵、内閣府沖縄戦関係資料閲覧室C-08-04
- 【11P】5 臨濟宗妙心寺派天授山万松院ホームページ「万松院の歴史」<https://www.syuribanshoin.com/about.php>
- 【26P】6 沖縄県教育庁文化財課史料編集班『沖縄県史 資料編23沖縄戦 日本軍史料沖縄戦6』（沖縄県教育委員会、2012年）p61-62
- 【48P】7 吉浜忍『沖縄の戦争遺跡 〈記憶〉を未来につなげる』（吉川弘文館、2017年）p51-53
- 【48P】8 沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書75 沖縄県の戦争遺跡』（沖縄県立埋蔵文化財センター、2015）p89-90
- 【49P】9 沖縄県立埋蔵文化財センター『令和6年度沖縄県立埋蔵文化財センター企画展：史跡円覚寺跡図録』（沖縄県立埋蔵文化財センター、2024年）p2-7
- 【50P】10 ひめゆり平和祈念資料館『ひめゆり平和祈念資料館資料集4 沖縄戦の全学徒隊』（フォレスト、2020年）p36-42
- 【52P】11 前掲『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書75 沖縄県の戦争遺跡』p209-212
- 【57P】12 前掲『ひめゆり平和祈念資料館資料集4 沖縄戦の全学徒隊』p48-56、p98-102
- 【58P】13 日本キリスト教団首里教会ホームページ「教会の歴史」 https://shuri-kyokai.ryukyu/church_history/
- 【62P】14 前掲『沖縄県史 各論編第6巻 沖縄戦』p345

編集

【事務局】

沖縄県知事公室平和・地域外交推進課

【編集】

株式会社まるとまるっと

【編さんワーキンググループ委員】

委員 仲程勝哉（沖縄県平和祈念資料館学芸員）

委員 山本正昭（沖縄県立博物館・美術館主任学芸員）

委員 秋山道宏（沖縄国際大学准教授）

委員 吉川由紀（沖縄国際大学非常勤講師）

委員 鈴木悠（那覇市歴史博物館主任学芸員）

【監修】

仲村真（沖縄県平和祈念資料館友の会事務局長）